緊張の中　牛歩邁進



（財）日本ハンドボール協会専務理事　川上 憲太

皆様、明けましておめでとうございます。昨年はハンドボール界にとって大変注目をされた年になりました。それと同時に「新しいゾーンに入った」ということが言えると思います。それは今までの「この程度で良い」、「一生懸命やっているのだから仕方がない」といった意識と行動では世の中が許さなくなったということです。今年はあらゆるポイントできちんとした目標値（あるべき姿）を認識し、それに向かってこつこつと邁進する年と位置づけたいと思います。

この機関誌が皆様のお手元に届く頃には、日本のハンドボール界はすでに大きく動き始めています。「世界を奪い返す」大きな動きです。1月初旬にはNTSのセンタートレーニングが高校生に続き中学生と実施され熱い指導が行われました。男子ナショナルはヨーロッパ遠征に強い決意で出発しました。また全国各地でも目標に向かっての動きが開始されたことと思います。

（1）世界を奪い返す

すでに2012年ロンドンオリンピックのアジア予選に向け、昨年から西窪強化本部長のもと、着々と強化方針が実施に移されています。世界の舞台での課題「①フィジカル、②フェイント力（1対1）、③スピード、④ルーズボール（執念）、⑤ノーマークシュート」の克服に邁進しています。

ややもすると、国内大会の勝敗の中に埋没し、世界への課題を忘れ、国内レベルで満足し、マンネリ化する傾向がすでに見えます。

昨年の北京オリンピックアジア予選での韓国戦、そして世界最終予選で本気で向かってきたヨーロッパの強豪と「心・技・体」すべてにおける「ディファレンス（差）」を強化の柱として一歩一歩鍛え上げていくことが「世界を奪い返す」道だと考えます。今年は女子世界選手権出場、そして2010年はアジア大会、ロンドンオリンピック前（2011年）にもう一度世界選手権が行われます。確実なステップアップは必要です。

（2）ナショナルトレーニングセンター（NTC）　フル活用

すでに多くの方々が使用していますが、日本の強化の「頂点道場」であるナショナルトレーニングセンターは24時間365日、いつでも使用可能です。諸機材・会議室・スタッフなど、トレーニング・研修の環境は万全です。

U-16、U-18、U-21、U-24と各カテゴリーのトレーニングは勿論、指導者・レフェリーの講習会、合同合宿、頂点強化・競技力向上のためなら何でも大丈夫です。NTCの100%フル活用こそ世界を奪い返す近道なのです。

（3）世界における日本の役割

「やり直し大会」に代表される日本における国際対応の問題は、まだまだ課題を残しています。今年は3月にAHF（アジアハンドボール連盟）の総会があり、役員改選の年でもあります。「アジアの正常化」は昨年少し前進しましたが、根本的な問題については注視が必要です。場合によっては再度闘牛のように正面からぶつかる場面もあると思っています。東アジア連盟（特に中国・韓国）の結束を強め対処していきます。IHF（国際ハンドボール連盟）も6月に総会が開かれ会長選挙が行われます。その結果によっては大きな変化が予想されます。きちんとした提言・行動が必要と考えています。

（4）ハンドボール界、全員で！

予想もしなかった世界大不況、日本経済の失速という突然の非常事態が世の中を覆っています。これはスポーツにとって、とりわけハンドボールにとっても必ず影響が来ると考えます。日本協会の財務体質は現在も万全ではありません。また皆さんそれぞれのチーム・学校・連盟・協会も同じではないかと思います。「お金が無いから何も出来ない」と考える前に、我がハンドボールの諸先輩の皆様が手作り・手弁当・創意工夫でこつこつ発展させてくださった努力・行動をもう一度振り返り、それを鏡にしてハンドボール界全員のチームワークで乗り切りましょう。厳しい時代こそスポーツが大切で必要だからです。一歩一歩堅実に目標に向かって邁進しましょう。

平成20年度

第60回全日本総合ハンドボール選手権大会

男子・大同特殊鋼（3年連続13回目）
女子・オムロン（4年連続12回目） が優勝を飾る

第60回全日本総合ハンドボール選手権大会を振り返り

石川県ハンドボール協会事務局長　川原 繁樹

全日本総合選手権大会は、各チームが勝利にこだわり日本一の栄冠を勝ち取ることを目指す、日本ハンドボール界最高峰の、一年を締めくくる大会である。参加チーム数も男女合わせて27チーム、レセプションなどの交流会的和やかなムードも必要ない。大会運営サイドからすれば比較的コンパクトな大会という認識であった。

しかしながら、実際に準備を進めていくと、今大会ならではの苦労も出てきた。新体育館での松ヤニ使用など施設利用上の問題点、初めてのスポーツコート敷設、最終日、男女決勝のNHK放送と殺到するマスコミ対策など。そして今大会最大の課題は、観客動員であった。本大会の競技会場となった「いしかわ総合スポーツセンター」は、昨春竣工した日本海側最大級のメインアリーナを有し、サブアリーナを含めるとハンドボールコート4面が確保できる規模の体育館。その『柿落としイベント』として今大会は位置付けられていたため、石川県の全面的支援を受けての開催となったものの、集客は我々運営サイドに委ねられていた。一人でも多くの方に生のハンドボールの試合を観てもらうため「平日無料、土日有料」開催方式での実施となった。

【17日水曜日】午前中の審判会議を皮切りに、午後1時からの代表者会議と開始式を無事に終了。午後3時、男子一回戦となる氷見クラブ対筑波大学のホイッスルがサブアリーナに鳴り響く。本大会最初の試合が北陸地区代表の氷見クラブというのも感慨深かった。いよいよ、5日間の競技の幕が切って落とされた。

【18日木曜日】男子は二回戦、女子は一回戦の各4試合が行なわれた。この日からメインアリーナ・サブアリーナ2会場での同時進行。男子では、ジャパンオープン優勝チームの三重ホンダクラブがHondaに後半終了間際まで同点と食い下がったものの、1点差で惜敗。女子の大阪教育大学は、HC名古屋に第二延長の末、1点差で敗れたものの大健闘の一戦であった。

【19日金曜日】この日から男女シードチームの登場となる。しかも無料開放最終日でもあり、ハンドボール好きには堪らないクリスマスプレゼントとなったはず！

男子では前年優勝の大同特殊鋼が、好調ぶりをアピールする試合展開で北陸電力を下した。2年連続ベスト4入りを目指す日本体育大学は、昨年の雪辱に燃えるトヨタ車体に完敗。湧永製薬はトヨタ紡織九州に逆転勝ち、大崎電気もHondaに主導権を取られることなく順当にベスト4への進出を決めた。

一方、女子は国体で旋風を巻き起こした筑波大学が広島メイプレッズを下しベスト4入りを果たす。オムロン・ソニーセミコンダクタ九州・地元北國銀行の日本リーグ勢3チームは順当に翌日の準決勝へコマを進めた。

【20日土曜日】メインアリーナのみでの競技開催となり、入場にはチケットが必要となる。競技会場内での制限区域におけるスタッフ配置にもピリピリとした緊張感が漂う。11時の会場と同時に観客は一斉に会場内へ。受付は大混乱となったが、12時のオムロンとソニーセミコンダクタ九州との試合開始はスムーズに始まった。女子の準決勝2試合は、現在の日本リーグ上位チームであるオムロンと北國銀行が危なげなく決勝進出を決めたものの、男子の準決勝は二試合とも好ゲームとなった。大同特殊鋼とトヨタ車体の前半は、14対14の同点。後半も粘るトヨタに大同GK高木の好セーブが光り、26対24の2点差でタイムアップ。続く湧永製薬と大崎電気の試合も後半終了間際まで1点を争う一進一退のゲーム展開となる。また全試合終了後、大崎電気の『宮﨑大輔選手のサイン会』を限定100名で行なったが、事前に準備した700名分の整理券は、あっと言う間に無くなった。あらためての宮﨑選手の人気の高さに驚かされる出来事であった。彼に続く、第二・第三のスター選手を育成する努力が、メジャースポーツとして認知される早道かもしれない。この時間帯には有料席がほぼ満席に近い状態となり、明日の観客動員もこれで一安心と、大会本部で密かに微笑む我々がいた。

【21日日曜日】今大会は約5000席収容可能なメインアリーナを、どうやって最終日満席にするか、大会成功の鍵はこの一点に集約されると言っても過言ではなかった。観客動員の観点から見れば、地元の北國銀行が決勝へ進出したのは大きく、11時の開場時間が近づいてきた。

女子決勝は午後1時にゲームスタート。北國銀行の出足が悪く7対3とリードされる展開。タイムアウト後に同点まで持ち込むが前半は12対9、オムロン4点リードで終了。後半は1点を争う展開のままホイッスル。延長戦へ突入するも決着つかず第2延長へ。このころ大会本部では、試合結果もさることながら、NHKによる男子決勝戦の放送時間も

迫ってきており、ハラハラドキドキの状態であった。結局、女子優勝はオムロンが 25 対 24 で北國銀行を下し 4 年連続の栄冠を勝ち取った。一方の男子は大同特殊鋼が 38 対 26 で大崎電気を退け、こちらも 3 年連続となる日本一を死守した。

表彰式でのプレゼンターは、石川県知事谷本正憲氏と日本体育協会会長であり地元出身の森喜朗氏からメダル授与が行なわれた。

大会期間中の天候は、最終日を除きほぼ好天に恵まれた。地球温暖化の影響か、競技場内では暖房すら必要のない良好なコンディションで、選手の皆さんにとってはゲームだけに集中できる環境が整えられたのではないかと安堵しています。また他県より参集された審判員の方々には、最高の笛を吹いていただき無事競技を終了できました。この誌面をお借りして感謝申し上げます。

最後に、日本ハンドボール協会事務局ならびに関係各位に深謝申し上げ、大会の報告とさせていただきます。

戦　評

【男子】

▼準決勝

大同特殊鋼　26（14 － 14、12 － 10）24　トヨタ車体

大同が白のカットインで 2 連取し、先制する。トヨタ車体も、高智のカットインで応酬するが、その高智が大同のフリースローの際に 3 m離れないというミスを犯し、4 分に退場。そのチャンスをフォーメーションプレーと末松の速攻でものにした大同が、前半 8 分 6 対 1 と 5 点リードに成功し、試合の主導権を握る。たまらずタイムアウトを請求したトヨタは、北出と長谷川を投入。ペースを変えるとともに、大同 5 － 1 ディフェンスの弱点であるサイドを突き、鶴谷、崎前のサイドシュートで追い上げ 22 分に追いつき、前半は 14 対 14 の同点で終了。

後半に入ると、大同は前半大活躍の白をコートに入れる。大同はその白のリードから武田のロングなどで得点を入れるが、トヨタも香川のロングなどで応酬。しかし、大同 GK 高木が当たりだす。後半 8 分、大同に退場者が出たが、高木の好セーブでトヨタは無得点。逆に大同武田にロングを入れられてしまう。トヨタは監督の野村をコートに入れるなど必死に流れを呼び寄せようとするが、大同・高木が立ちはだかる。25 分、大同白のロングが飛び出て勝負があったかと思われたが、トヨタは藤田の 2 連続速攻で 28 分には 2 点差に迫る。トヨタはディフェンスを 3 － 2 － 1 に変え、ボールを手にするが、肝心のシュートが入らず無念のタイムアップ。

大崎電気　24（11 － 9、13 － 13）22　湧永製薬

東のシュートで湧永が先制。対する大崎も返しの攻撃で負けじと得点する。両チーム一進一退のプレーが続く。ようやく 7 分に大崎・宮崎の速攻、8 分に東のポストシュートで 2 連取し一歩抜け出す。2 点差を詰めようと湧永が奮闘するが、ミスや大崎 GK 浦和の好セーブで得点につながらない。3 点差に開いた得点が 17 分に湧永・新の得点で 2 点差に、大崎も点差を広げようとするが、こちらもシュートミス等で思うようにならず、前半 3 点のリードで折り返す。

後半、湧永・古家のシュートで 1 点差に、4 分福田が同点のシュートを狙うがポストに嫌われる。8 分大崎・内田の退場で湧永に 7 mT が与えられ、確実に決めるがすぐさま反撃で 1 点差になる。11 分には、湧永・東の 7 mT で同点にし、その後 1 点を争うゲーム展開に会場大興奮。29 分 20 秒、湧永はスカイプレーを仕掛けるが失敗。最後は、大崎が東のシュートで 2 点差とし、勝利した。

▼決勝

大同特殊鋼　38（20 － 12、18 － 14）26　大崎電気

両チームとも中央を厚く守る 5 － 1 ディフェンスを採用したため、攻撃では 2 枚目のディフェンス、下のポストプレーとサイドシュートの出来が勝敗の鍵を握ると予想された。

先手を取ったのは左腕・山城がサイドシュートを決めた大同。その後も武田、山城の速攻を繰り出した大同が 3 対 0 と好スタートを切った。対する大崎は永島の速攻で返すが、その後も多彩な攻撃を繰り出す大同が富田のポストや山城のサイドで得点を重ね、14 分 6 点差をつけたところで、大崎がタイムアウトを請求。攻撃の手をゆるめない大同は、白の個人技も絡めて差を広げ、内田のサイドシュートなどが散発的に決まる大崎に 8 点差をつけて前半終了。





後半が始まると、大崎は前日のラッキーボーイ岩永を投入。その岩永が期待に応えミドルやカットインで差を詰めようとする。しか

しここで大同 GK 高木が前日に続き好セーブを連発する。大崎は頼みの宮崎を完全に押さえられてペースが上がらない。大同はシステムチェンジやポジションチェンジを繰り返し、余裕の攻撃。その後は宮崎が驚異の滞空時間のサイドシュートでこの日最初の得点をあげるが差は縮まらず、大同が悲願の３連覇を達成した。

【女子】

▼準決勝

オムロン 31（17 − 7、14 − 14）21 ソニーセミコンダクタ九州

オムロン東濱の先制点から動き出した。オムロンは高めの一線、ソニーは低めの一線。前半６分まで３対３と接戦の様相をうかがわせる。ところが、ソニーが立て続けに警告３枚、12 分には初の退場者を出してしまい、オムロンは８連取で 11 対３とする。オムロンが高い位置からソニーのパス展開を狂わせたのに対し、ソニーは９m以内で横に振られてカットインの場面が多く、17 対７と大差がついてしまった。

後半はソニー長野の先制点から一進一退の展開が続く。ソニーのディフェンスもけん制からよく動き、オムロンの得点ペースは完全にダウン。両チーム GK も随所に好キーピングを見せてくれた。後半の得点が 14 対 14 と同点なだけにソニーとしては前半 15 分のエアポケットが悔やまれる試合となった。

北國銀行　35（18 − 9、17 − 14）23　筑波大学

勢いに乗る筑波大に対し、警戒心を強める北國は試合開始から闘志あふれるプレーを展開し、横嶋のサイドで先制。上町のミドル、横嶋のポストで着々と加点する北國に対し、司令塔石立の好リードから黒木のサイドシュートで対抗する筑波大だが、気迫あふれる北國のディフェンス網を攻めあぐね、14 分過ぎには 11 対４と北國リード。その後も、北國は前半だけで７得点の横嶋や守護神・田代の再三の活躍でリードをさらに広げる。残り５分からは筑波大も高橋の７mT や黒木の速攻で互角の展開に持ち込んだが、９対 18 の９点ビハインドで折り返す。

後半も前半の大量リードで余裕の試合展開を見せる北國。大砲作内の故障欠場を全員ハンドでカバーしようとする筑波大になかなかつけいる隙を与えず、終始北國ペースで試合終了。悲願の地元優勝にあと１勝とした。点差が開いても石立、山野、中西の地元出身選手をはじめ最後まで健闘した筑波大学の健闘を賞賛したい。

▼決勝

オムロン　25（12 − 9、7 − 10：3 − 3、3 − 2）24　北國銀行

藤井のカットインでオムロンが先制。北國も負けじと上町のロングシュートで取り返す。その後、北國は武井、上町、若松の速攻で４対２とリードするが、オムロンも速攻につなげて２点を連取、一進一退の展開が続く。両チームともディフェンスが安定しているが身長差は徐々に北國にプレッシャーとなり、ポストにディフェンスが集まったところを狙われ失点、前半は 12 対９とオムロンが３点リード。





後半、北國は上町のカットインを中心に８分 35 秒ついに 14 対 14 で追いつく。しかもオムロン、攻守の要・坂元の退場もあり、９分、宮前のサイドシュートで勝ち越しの１点をもぎ取る。すぐにオムロン佐久川がサイドを決め、一進一退の攻防戦へ。24 分に藤井がサイドでループを決め 19 対 18 とオムロンが勝ち越し。このままオムロンの勝利かに見えたが、29 分 36 秒、北國・上町がロングを決め 19 対 19 の同点に。会場は大声援で盛り上がり、延長戦へ。

延長前半はオムロンが洪のカットイン、城内の速攻で２連取。ここで北國は上町、野路里子が決め 21 対 21、終了間際にオムロン・佐久川が決めて延長後半へ。両チーム GK の好キープで得点ができない。３分 58 秒、北國・上町が７ｍＴ決め、22 対 22 で第２延長へ。

第２延長前半、狙いすましていた上町がボールカットからの速攻で 23 点目。４分 35 秒にはオムロン藤井が７mT を決め、同点。後半はオムロンが速攻、７mT で２点リード。北國の反撃を１点にしのぎ、25 対 24 でタイムアップ。



全日本総合の戦いを終えて

筑波大学ハンドボール部　小松 史果

12 月 18 日、学生最後の大会が始まった。今大会の目標というよりも、私たち 2008 年度のチームの最終目標は「全日本総合ベスト 4」であった。学生に勝つというのはもちろんのこと、実業団にも勝てるチームを目指して 1 年間練習を行ってきた。昨年は 10 月に大分で行われた国民体育大会で準優勝することができたので、決勝で敗れた北國銀行（石川県）にリベンジしようという意気込みがあった。

1 回戦の大分コスモスビッキーズとの対戦は、序盤から自分たちのリズムがつかめずに相手の好きなようにプレーされていた。私たちが学生であるため速攻で走って点を獲得したようなもので、セットオフェンスでもシュートミスが目立ち、終始流れがつかめないまま試合が終了した。先生方からもこの状態では実業団に戦えないと指摘を受けた。私たちもこのままではいけないという思いがあった。もうここまで来たらやるしかないという気持ちで 2 回戦に臨んだ。

2 回戦は広島メイプルレッズとの試合で 3 回目の対戦であった。3 回目ということもあり、相手の特徴も理解していた。実業団との試合では点の取り合いをしても勝つことはできないとわかっていたのでディフェンスを固めていこうと話していた。1 回戦の試合とは打って変わりチーム全体が集中していた。自分たちがやろうとしていたディフェンスがよくできていたと思う。シュートを決められたと思ってもキーパーが止めてくれたりして、連携がよく取れていた。オフェンスではミスが目立つ時間帯もあったが、どのポジションからもバランスよく得点できていた。相手も必死だったが、私たちも負けたくないという気持ちが強かったので、粘り抜くことができた。前半のリードもあったため最終スコアは 22 対 15 であった。ついに目標としていたベスト 4 にたどり着くことができた。準決勝でもこの勢いで戦えば、いい試合ができると思っていた。

準決勝。相手はリベンジしようと意気込んでいた北國銀行。キャプテンが「自分たちはこの日を目標にやってきた。実業団は 1 年間の試合の中の 1 つにしかすぎないかもしれない。勝ちたいという気持ちは自分たちの方が上。今までやってきたことを思いっきりやろう。」と円陣を組んだ。

やる気は十分であった。しかし、実業団はそんなに甘くはなかった。ディフェンスで全くリズムを作ることができず、相手の好きなようにプレーされた。ライン際でのシュートを打たれてはキーパーも止めにくい。そのためロングシュート勝負にしようとしていたが、ポストやサイドなどのライン際でのシュートばかり打たれてしまった。逆にオフェンスではシュートを打つというよりも打たされているシュートの方が多いように感じた。結局最後まで修正できずに終わってしまった。

何もできなかったという悔しさが強かった。悔しいという思いもあったが、このチームで試合をすることはもうないと思うととても寂しい気持にもなった。 4 年間本当に色々なことがあったが、とても楽しくハンドボールができたと思う。

大学 4 年間、同じ筑波大学というチームであるが、それぞれの年で別のチームだったような気がする。私が最終学年のチームであるから、かもしれないが私はこのチームが一番好きである。できることならこの 20 人とスタッフの方々でずっとやっていきたいと思った。しかし、そのようなことはできない。学生最後の大会が終わってしまったが、まだハンドボールを続けるメンバーもいるので、先生方への恩返しとまではいかないが、できる限り練習に参加しようと思う。これからは新チームをしっかりとサポートしていきたいと思う。

最後になりましたが、水上先生、河村先生やスタッフの方々、4 年間ありがとうございました。引退という形になりましたが、これからも（特に残りの 3 か月間）はよろしくお願いします。

最終順位

■男子　優勝　大同特殊鋼（３年連続 13 回目の優勝）
２位　大崎電気
３位　トヨタ車体
３位　湧永製薬

■女子　優勝　オムロン（４年連続 12 回目の優勝）
２位　北國銀行
３位　ソニーセミコンダクタ九州
３位　筑波大学

個人表彰

最優秀監督賞
男子　清水　博之（大同特殊鋼）
女子　黄　慶泳（オムロン）

最優秀選手賞
男子　武田　享（大同特殊鋼）
女子　藤井　紫緒（オムロン）

大会を観て

■会場内の様子



決勝戦当日には、11 時 30 分の開場を待ちきれないファンが体育館の外側に長蛇の列を成しており、開場と同時に怒涛のごとくなだれこんできた。ハンドボール人気も捨てたものではないと思わせる一幕であった。入場経路は一般席・アリーナ席それぞれ一本に絞られており、観客たちは整然とメインアリーナへ入っていった。

出入り口付近ではチケットおよびプログラム（一部 500 円）の販売、10 万人会の入会受付が行われていた。見目鮮やかな勝ち上がり表が目を引いた。ベニヤ板を組んだ物にオレンジ色のトーナメント表が貼り付けられている。得点および勝ち上がり状況がシールとテープで示されており、非常に見易くなっていた。

メインアリーナには一般席とアリーナ席（プラス 500 円）の二種類の座席が用意されていた。アリーナ席は、プレーオフなどで目にするコート横の仮設スタンドである。一般席は入り口側のゴール裏（二階）と、コート両サイド（二～三階）の三面である。ゴール裏席の一部に 10 万人会席が割り当てられていた。アリーナ席に対面した一般席がチーム応援席として利用されていた。各階にはエレベーターでも移動することができた。決してアクセスが良いとは言えない会場であったにも関らず、決勝当日はほぼ満員で、立ち見するファンの姿も見られた。ハンドボール好きとしては何となく嬉しいものである。

場内の一角に出店が設けられており、様々なハンドボール関連商品が売られていた。今大会の記念シャツ、昨夏のインターハイの記念Ｔシャツ、トレーニングウェア、指導用 DVD、日本協会関連の小物（携帯ストラップ、クリアファイルほか）、ハンドボールシューズなど多彩な品揃えである。

選手たちがメインアリーナでアップを行っている際に、場内 BGM として当世の流行歌が流れ出した。すると、競技役員数名がスタンドのファンを煽るようにして頭上で手拍子を取りだした。観客の一部が手拍子をもって応じる。実に和やかな光景であった。このときに限らず、放送席の役員は常に陽気に業務をこなしていた。具体的にも抽象的にも明るい会場であったと言える。

■試合前

試合開始の時刻が迫るにつれてチーム応援団も集結してくる。地元・北國銀行の応援団は凄まじい気合の入りようを見せており、応援の準備に余念がない。応援席はチームカラーである緑色に染まっていた。

フロアに目をやると、レフェリーがコート脇に控えるモップ担当者と握手を交わしていた。粋な計らいである。ともすれば雑役夫のようにみなされがちなモッパーだが、彼らの存在抜きにすばらしい試合は成立しないのだ。彼らへの配慮をも怠らないあたりが、全日本総合の一戦を任されるようなトップレフェリーのトップレフェリーたる所以なのであろう。

さて選手が入場してくる。ここではプレーオフに見られるような派手な演出（暗転、照明の乱舞、大音量の BGM など）はない。マッチバイザー、レフェリー、チームスタッフの紹介の後、名前を呼ばれた選手が（決勝戦では小学生ハンドボーラーの手を引きつつ）入場してくるという至ってシンプルなものだった。北國銀行の選手たちがスタンドにプレゼントを投げ込み、ファンは大喜びであった。

■女子決勝

いよいよ試合開始である。北國銀行、オムロン両チーム応援団が乱打する太鼓の音が腹の底まで鳴り響く。音が空気の振動であるということを実感させられる。また、シューズがコートと擦れ合う音、シュートがバーを叩く音、選手の雄叫び、観客の歓声やどよめきなど、テレビや文字媒体からは決して伝わってこない音声が会場では聞こえてくる。これぞスポーツ観戦の醍醐味である。

女子決勝は北國のホームゲームと言ってよい状況だった。観客は北國の一挙一投足に一喜一憂する。北國が得点を挙げれば大歓声が沸き起こり、攻撃に失敗したり失点したりすると場内は悲鳴とため息に満たされた。マイノリティたるを余儀なくされたオムロン応援団は、それでも健気に声援を送り続ける。

ハーフタイムのコート上では地元ダンスグループが演技を

披露した。いわゆるハーフタイムショーであろう。この間に、役員たちがゴールにとりついた。ゴールネットに不都合でも生じたのか、と思う間ゴールが運び出されていった。入れ違いに別のゴールが運ばれてきて、何事もなかったかのようにゴールの交換は終了した。見事な手際であった。

第二延長にまでもつれこむ熱戦となった女子決勝。観客の試合への没入ぶりには尋常ならざるものがあった。試合終了のブザーが鳴るや、体育館は北國ファンのため息に満たされたが、すぐに両チームの健闘をたたえる万雷の拍手が鳴り響いた。興奮冷めやらぬ観客の表情からは、「良いゲームを観た」という満足感が見てとれた。

■男子決勝

女子決勝が第二延長までもつれ込んだため、試合終了時には男子決勝戦開始予定時刻が目前に迫っていた。試合開始を遅らせるのかと思いきや、間髪を入れずに選手入場が始まり試合が開始されたため、応援団の入れ替えが追いつかなかった。開始後数分間は鳴り物なしの寂しいゲームとなっていた。先の試合の盛り上がりようとの違いが際立った。

観客の大多数は大崎電気を応援していたように思われた。ところが周知のようにこの一戦は早い段階からワンサイドな展開となったため、スタンドは心なしか倦怠感のようなものに包まれていたように感じられた。携帯電話のカメラで宮崎選手を追いかける観客が多く見られた。誠にチームスポーツの良し悪しとは、多分にその結果の未確定性に拠っているのである。決勝戦の男女における観客の反応の相違がこのことを如実に語っていた。大崎の選手たちが最後まで互いを鼓舞するべく声を掛け合う姿が見られたのが救いだった。どの競技レベルにおいても、重要なことは変わらないのであろう。

■試合後

体育館出入口付近は、帰宅するファンと、宮崎選手を待っていると思しきファンとでごった返していた。

そんな中で募金活動が行われていた（大会三日目から最終日まで連日行われていたとのこと）が、募金箱を手にしているのはつい先ほど試合を終えた選手たちである。サインを求めるファンに気さくに応じる選手の姿もあった。いずれもユニフォームを着たままである。また、決勝戦で敗れた宮崎選手も、時間が許す限りサインに応じるなどファンサービスに余念がない（出入り口付近でサイン用色紙が 300 円で売られていた）。負け試合の直後で心中穏やかではない選手もいただろう。何とも頭の下がる思いである。勝負の世界に生きる者が同情されてはおしまいだとは言うが、それは選手個人が自発的に心がけるもので、ファンの側から選手に対し無責任に要求するものではないはずだ。ファンの側にも配慮があってもよいのではないか。一人のハンドボールファンとして思った。

話が前後するが、準決勝後には宮﨑選手のサイン会の時間が確保されていた。これに先立ち、大崎電気対湧永製薬の一戦のハーフタイム中に抽選券が配付され、当選者のみがサインを貰えるという仕組みになっていた。宮﨑選手がサイン会場（体育館出入口付近）に姿を現すや、黄色い歓声とともにファンが殺到した。恐れ入るばかりの人気ぶりある。



決勝戦後に、実施するかの調整の末、結局宮﨑選手がサイン会を行うことになった。これはチームの事情もあり当初より十分間限定という約束で開始されたものだった。当然ながら全てのファンに彼のサインは行き渡らなかった。宮﨑選手は律儀にも、サインにあぶれたファンたちと握手を交わして去っていった。ひどく悔いが残るであろう敗北の直後だったにも関らず、見上げたプロ根性であった。こういったことについては県協会の方々もさぞや心を砕かれたに違いないと推察する。

■大会を通じて



あるスポーツイベントの成否の判断基準として、「観客が満足して帰ったか」という点が重視される。観客を満足させるために要求されるものは何か。当然、「良い試合」が行われることは欠かせない。「良い試合」とはすなわち、両チームの実力が高いレベルで拮抗した、最後まで結果の見えない試合である。この点については実際にプレーする選手の力による部分が多いので、常時確保できるものではない。そこで試合を観ること以外の点においていかに観客を満足させるかが重要性を帯びてくる。つまり、感情移入するチームの勝敗に関わらず、観客個人が楽しめるよう配慮しなければならないわけである。スポーツ観戦という体験は、ただ 30 分ハーフの試合を見るだけに止まるものではない。ゲーム以外の多くの要素がスポーツ観戦の面白みを支えているとも言えよう。この観点から今大会を振り返ってみるとどうだろうか。それについては以上に触れてきたつもりである。

最後まで結果が見えぬ好ゲームがあった。スタンドを埋めた観客は大声援を送った。そしてそれらを重厚に下支えする環境が、役員諸氏の情熱によって作り出されていた。大会最終日のあの熱狂が、それらの証左となるはずだ。

ハンドボールの日本国内における発展の可能性を今大会にみた、とまで書くのは好意的に過ぎるだろうか？

機関誌編集委員会　小林弘樹

高松宮記念杯男子第51回女子第44回

平成20年度
全日本学生ハンドボール選手権大会







総 評

中四国学生ハンドボール連盟理事長　高野　修

男子32大学・女子24大学、合計56大学チームが集い、本年度の学生日本一を競う本大会が、11月20日から24日まで周南市総合スポーツセンターを主要会場として、下松市スポーツ公園体育館において開催された。

男子は、大会前の下馬評では、東の第1シード日体大が、本年7月の世界学生選手権（イタリア開催）代表5名（棚原・石川・東長濱・生川・GK甲斐・U 24）をはじめ、各世代の全日本選手を擁し、何処からでも得点できる攻撃力とGK甲斐の堅守で3連覇がなるか、また、それを東海大・筑波大・早稲田・日本大の関東勢、西の第一シードの大体大（関西)、中京大・名城大の東海勢が追う展開と見られていたが、順当に勝ち上がった日体大が、決勝では前半出遅れた早稲田の野村（U 24)、佐野等での追い上げを振り切り、3連覇・19回目の優勝を飾った。

近年、各地区学連の競技力の向上で、1回戦から随所に接戦が見られ、好試合となって表れてはいるが、ベスト8になると、此処数年は関東勢が6、関西・東海が各1と言う状況で、更にベスト4を見ると2年連続で関東勢が占めているのが目立っていた。

女子は10年間で9回、通算14回目の筑波大―東女体の決勝戦となった。筑波大には石立・高橋・小松・石野・山野・作内・他のU 24、東女体大は稲葉・国保・早川のU 24（世界学生代表）・張（アテネ五輪元韓国代表）を擁して、ハイレベルな戦いを見せたが、筑波大が接戦を制して3年連続11回目の優勝を勝ち取った。

最近10年間は殆ど関東・関西・九州勢がベスト4を占めているが、今大会は九州勢の退潮と、国士舘大が西の第一シードの武庫川女子大を準々決勝戦で破った活躍や、東北・北信越・中四国のレベルアップが目についた。

個人を見ると、男子は、日体大・早稲田の両GKの攻守が特筆される。CPはベスト4では日体大のスタメン全員、早稲田の野村、佐野、藤本、筑波大の木村、樋口、出村、東海大の白鳥、根本、ベスト8では桑野（名城大)、森（大体大)、村上（日本大）等の活躍が目に付いた。また、女子では、筑波大のスタメン全員、稲葉・張・国保・石井（各東女体)、大城（大教大)、斉藤（国士舘)、ベスト8では、村山（早稲田)、柴山（武庫川）が目立っていた。

運営面を見ると、開会式および閉会式で、地元の合唱団の方々のご協力で、国家斉唱、表彰式での宮杯返還、優勝旗・優勝杯授与、他の時の「勇者は帰らず」といったバックコーラスがあったが、本年7月、イタリアで開催された世界学生の開会式でも、地元ヴェネチアの合唱団のコーラスがあった事も聞いていて、従来のバック音楽（テープ含む）とは異なった趣が感じられた。

山口県高校出身者も20名内外がエントリーされ、活躍も期待されていた事や、地元の各協会関係者の尽力で、多数の観客の動員、応援もあって、選手の励みにもなった事や、国体を控えた地元の運営協力で、特に大きな事故も見られず、大会を盛況裡に終える事が出来た事に感謝いたし、お礼を申し上げます。

男子優勝 日本体育大学（3年連続19回目）



日本体育大学主将　染谷 雄輝

平成20年11月20日から24日まで山口県周南市で行われた全日本学生選手権大会で優勝、そして三連覇できたことを大変嬉しく思っています。また17年ぶりの三連覇の年の主将を務めさせて頂いたことはとても光栄であり満足しています。

今年は春季リーグ戦から4年生レギュラーメンバーで出場しているのが私ひとりだったので、主将である私がしっかりしなければチームは絶対に纏まらないという思いが常に頭の中にありました。もちろん全日本インカレ三連覇というプレッシャーもあり、一年間とても苦労しました。しかし、全日本インカレで私たち日体大に絶対の自信があったのは、年間を通して走りのトレーニングを積んで来たからです。他の大学に負けないくらい走り続けてきた結果、体力では負けない自信が選手間にあったのは間違いありません。私たちは一年中走り込みをしてきましたが、特に印象に残っているのは春・夏合宿で何度も倒れそうになり、痛い足を引きずりながら頑張って練習をして来たことです。今考えてみればあの苦しい走り込みをしてきたので、日体大の「走るハンドボール」が一人一人に身につき三連覇に結びついたと思っています。優勝した瞬間は四年間の苦労が込み上げ、嬉し涙が出てきました。

私は4年生最後の学年で主将を務めさせて頂き、優勝できたことをとても誇りに思っています。優勝できたのは他の4年生を始めチーム全員、ご指導をしてくださった監督、コーチ、トレーナー、そして今日まで支えてくれた保護者の力強い応援、日体大関係者の皆さまのお陰だと思っています。後輩たちには「走るハンドボール」をこれからも継承してもらい、全日本インカレ四連覇、そして全日本総合での優勝を目指し努力を重ね精進してほしいと願っています。

女子優勝 筑波大学（3年連続11回目）

筑波大学女子ハンドボール部　高橋　恵

思い返せばこの一年、あっという間に過ぎていきました。

春リーグ戦では、チームにケガ人が多く入学して間もない1年生も出場しなければならない苦しいチーム状況でした。そんな中でも今いるメンバーで今できることをやっていこうという気持ちで戦っていきましたが、最終的には得失点差“1”での敗北。一点の重みを痛いほど味わいました。

それからというもの、あの一点での敗北の悔しさを忘れたことはありませんでした。このチームに何が足りなかったのかを追求し、徹底してチーム全員の意識改革につとめていきました。

夏の合宿では実業団チームにも胸を借り、充実した練習をすることができたためチームの柱となるものが春よりも明確になっていきました。

その成果もあり、秋リーグ戦で優勝はしたものの優勝した喜びよりもインカレへの不安の方が多いまま、すぐに行われた国体に出場しました。

多くの実業団のチーム相手にチャレンジャーとしてのぞめたため、のびのびと自分たちの持ち味を出すことができ、決勝戦まで進むことができました。

この国体での試合はそれ以後チーム戦術がうまく機能せず行き詰った時に、いいイメージとして思い出せる絶好の指標となりました。

インカレでは優勝はできましたが内容的にいい試合ができたかといったら、自分たちの目指す100％のゲームはできなかったように思います。それでもこのメンバーと、自分たちの目指すハンドボールさえできれば、絶対に結果はついて



くるという自信と信頼感があったのがこのチームの強みでした。

またこの優勝は、山口県まで遠路はるばる足を運んでくださった方々、遠くから応援してくださっていた多くの方々に支えられての優勝であり、感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。

このチームが始動してからインカレ優勝はもちろんのこと、実業団チーム相手に互角に戦えるチームになることを目標にやってきました。

インカレで優勝できたことにより、全日本総合の出場権を獲得しました。インカレ優勝で満足するのではなく、ラストチャンスとなる全日本総合では一試合でも多くこのチームでプレーしたいです。実業団のチームとはまた違った学生らしさを石川の地で表現できるよう、残りの時間を大切に練習に励んでいきたいと思います。

戦　評

【男子】

▼準決勝戦

日本体育大学　35（13－12、22－15）27　筑波大学

立ち上がり1分半、2分とたて続けに警告が出るなど激しい攻防が展開されて熱の入った戦いとなった。筑波大が2連取で先手を取り、それを日体大が追う展開となったが、4対5から10分27秒、棚原（U 24）のミドルを皮切りに、塚本､加藤を挟み7連取した日体大が主導権を握った。その後、日体大は18分42秒、東長濱（U 24）の7ｍからの得点以降、8分間で3点とペースダウン。それを宮崎、木村（U 24)、木切倉で追い上げた筑波大が29分41秒12対12としたが、残り2秒に東長濱が決めて13対12と日体大リードで前半終了。後半開始早々、染谷の速攻から得点、しかし、筑波大も宮崎、木村のポストで返し14対14としたが、その後、4連取した日体大が再度ペースを握り、GK甲斐の好守を背景に、棚原、東長濱などでコンスタントに加点、25分、5点差まで追い上げた筑波大を、26分51秒からの4連取で突き放し7年連続の決勝進出を決めた。

早稲田大学　33（5－12、20－13）30　東海大学
（延長　2－1、6－4）

初の決勝戦進出を目指す東海大は立ち上がり、やや堅さが見られ2連取を許すが、早稲田が4分過ぎから10分間無得点の間、根本、白鳥、永島などで加点し6対3とする。更に、早稲田が24分から6分間無得点の間、白鳥を中心にコンスタントに加点し、ロースコアながら東海大が前半を12対5と7点差で折り返す。後半開始直後、東海大に3、4、5分と3連取され16対8と8点差をリードされたが、早稲田は佐野の速攻から攻撃のリズムを取り戻し、6分15秒の野村（U 24）のミドルから小鹿のポストなどを絡め6連取で追い上げ、GK永瀬の好守で東海大の得点を最小限に抑える間に、13分5秒佐野の速攻からの得点で攻撃の流れを掴み1点差に。その後、1点を争う展開となったが、26分11秒、佐野の速攻で早稲田が逆転。東海大も28分30秒、白鳥が7ｍを決めて同点、早稲田がノーマークを外し延長戦に。

延長戦に入って藤本の得点で先手を取った早稲田が、東海大を振り切り、大逆転で一昨年以来、2年振りの決勝進出を決めた。早稲田では逆転のきっかけを作った佐野、敗れた東海大では白鳥の活躍が目に付いた。

▼決勝戦

日本体育大学　31（18－11、13－17）28　早稲田大学

互いにパワーとスピードを身上としたチームであるが、スタメンにU 24を擁する攻撃力とGK甲斐の堅守で安定したチーム力を見せる日体大に、本大会に入り本来の動きを取り戻し、GK永瀬の好守をベースに決勝進出を果たした早稲田がどのように挑むか注目の一戦となった。佐野の速攻から早

稲田が先行したが、日体大も生川のポストで直ぐに返し、早稲田がミス多発から6分間無得点の間に、棚原のミドル、染谷の速攻などで4連取し主導権を握り、その後も、棚原、石川、生川などがコンスタントに得点、GK甲斐の好守もあり、早稲田の攻撃を押さえ前半を8点差で折り返した。

後半開始1分に棚原のディスタンスシュートが決まり8点差とされた早稲田が、その後、3得点で5点差としたものの、日体大が更に4連続得点で9点差となった。しかし、早稲田もGK永瀬の好守を背景に16分45秒、佐野のカットインの得点から攻守がかみ合い反撃に転じて追い上げたものの、準決勝戦の再現はならず、日体大が3点差で逃げ切り、3年連続19回目の優勝を手中にした。両チームのGKによるファインセーブの応酬が会場を沸かせた。

【女子】

▼準決勝戦

筑波大学　34（16－13、18－8）21　大阪教育大学

石立（U 24）の好ゲームメイクから作内（全日本）、石野（U 24）がコンスタントに得点、9分には8対3と筑波大がリード、しかし、その後、大教大のDFの頑張りから筑波大の攻撃を抑える間に、大城（U 24）、増田（U 21）で2点差に詰め寄る。14分過ぎからは、互いに点を取り合う展開となったが、前半は筑波大が3点差のリードで終了。後半に入ると、筑波大は、小松、黒木、石野、作内などでコンスタントに加点、9分32秒には小松のミドルで22対14とリード、その後の大教大の攻撃を抑え、3年連連続決勝進出を決めた。

東京女子体育大学　32（21－11、11－9）20　国士舘大学

秋季リーグは、主力の張（元韓国代表）、池之端（U 21）の故障があり不本意なシーズンで終ったが、主力の復帰で本来の力を見せている東女体大か、西ブロック第1シードの武庫川に競り勝った国士舘の初の決勝進出がなるか注目されたが、開始22秒、張の得点から6連取した東女体が主導権を握り、以後も、稲葉（U 24）の好リードから着々と加点。13分過ぎまで倉持の得点のみに抑えられていた国士舘も、本来の動きを取り戻し点の取り合いとなったが、立ち上がりの10点差のまま終了。後半開始早々に国士舘が3連取し追撃かと思われたが、2分10秒斉藤の得点から12分22秒、樽井の得点までの10分間に1得点と抑えられ、その間、稲葉、張に6点を許し27対16とされた。その後も東女体大がコンスタントに得点し3年連続決勝進出を決めた。

※準決勝戦敗退両大学は3位。優勝大学に敗れた3位大学が全日本総合選手権大会に出場

▼決勝戦

筑波大学　25（12－12、13－8）20　東京女子体育大学

ここ10年間で9回目となる筑波大―東女体大の決勝戦対決、互いに手の内を知り尽くした対戦となった。

開始1分5秒、更に1分46秒にサイド石井が2連取し東女体大が先行した。筑波大も作内のミドルで返し、6分26秒、小松の得点で3対2としたが、3分、4分には続けて警告が出るような激しい攻防でロースコアの展開となった。東女体大も7、8、9分と石井、坂本で3連取し5対3。10分から15分に間、石野のミドルなどで4連取した筑波大が8対6。16分には東女体大が石井のサイドシュートから3連取し9対8と二転三転。27分28秒、石野の得点で2点差とした筑波大が抜け出したと思われたが、終了間際、石井、張で連取し12対12で前半が終了。

後半、東女体大が5分4秒に稲葉の得点から10分間無得点の間に、筑波大が作内のミドルを皮切りに13分までに4得点で21対16とし優位に立った。20分過ぎからは互いに取り合って5点差のまま推移。筑波大が25対20で3年連続、11回目の優勝を飾った。筑波大の作内の9得点、東女体大は石井の7得点の活躍が目立った。

【最終成績】

[男子]		[女子]	
優　勝	日本体育大学	優　勝	筑波大学
準優勝	早稲田大学	準優勝	東京女子体育大学
3　位	筑波大学	3　位	大阪教育大学
	東海大学		国士舘大学

【個人賞】

◇男子優秀選手
GK　甲斐　昭人（日体大）
CP　棚原　　良（日体大）
CP　染谷　雄輝（日体大）
GK　永瀬　郁実（早稲田）
CP　野村　喜亮（早稲田）
CP　木村　雅俊（筑波大）
CP　白鳥　孝道（東海大）

◇男子特別賞
CP　東長濱秀希（日体大）
CP　藤本　純季（早稲田）

◇男子優秀監督賞
松井　幸嗣（日体大）



◇女子優秀選手
CP　高橋　　恵（筑波大）
CP　石立真悠子（筑波大）
CP　小松　史果（筑波大）
CP　石井　宏実（東女体）
CP　張　素　姫（東女体）
CP　大城　夕貴（大教大）
CP　斉藤　祐佳（国士舘）

◇女子特別賞
CP　作内　杏那（筑波大）
GK　表寺　由貴（東女体）

◇女子優秀監督賞
水上　　一（筑波大）



第12回女子アジア選手権
(2009 世界選手権予選)
2008.11.21～30：タイ（バンコック）

日本は第3位、第19回女子世界選手権出場権を獲得

【最終順位】
1位　韓国
2位　中国
3位　日本
4位　タイ
5位　カザフスタン
6位　ベトナム
7位　イラン
8位　インド
9位　ウズベキスタン
10位　カタール

アジア選手権について
日本代表ヘッドコーチ　黄　慶泳

北京五輪予選では、アジア予選、再予選と世界最終予選を重ねながら挑戦して来た夢のオリンピック出場でしたが、結果としてハンドボール界は悔しい思いをしました。しかし、新しい体制のもとで皆が改めて夢を持ち、ロンドンオリンピックに向けて再スタートをしています。

そういう意味でも今回の大会がもたらす意味合いは大きな部分があったと思います。

ロンドンオリンピックに向けた第一歩として世界選手権の切符を取ることが今回の課題でありました。その中でも選手達がこの大会を通して、アジアに対して自信を取り戻すと同時に、やれるということを肌で感じていれば次に繋がると思うし、絶対そのような大会にしなければならないと強く思っていました。

自分の中では、この大会で他の国に遅れたら絶対に4年後もないと危機感を持って大会に挑みました。

■選手名簿

役　職	名　前	ふりがな	所　属
団　長	西窪　勝広	にしくぼ　かつひろ	(財)日本ハンドボール協会
監　督	黄　慶泳	ふぁん　きょんよん	(財)日本ハンドボール協会
コーチ	田中　茂	たなか　しげる	(財)日本ハンドボール協会
ドクター	佐久間　克彦	さくま　かつひこ	熊本赤十字病院
トレーナー	高野内　俊也	たかのうち　としや	(財)日本予防医学協会

		名　前	ふりがな	所　属
1	GK	飛田　季実子	ひだ　きみこ	ソニーセミコンダクタ九州
2	GK	勝田　祥子	かつだ　さちこ	オムロン
3	GK	田代　ひろみ	たしろ　ひろみ	北國銀行
4	CP	佐久川　ひとみ	さくがわ　ひとみ	オムロン
5	CP	坂元　智子	さかもと　ともこ	オムロン
6	CP	上町　史織	かみまち　しおり	北國銀行
7	CP	城内　真紀	じょううち　まき	オムロン
8	CP	巻　加理奈	まき　かりな	オムロン
9	CP	伊藤　瞳	いとう　ひとみ	広島メイプルレッズ
10	CP	伊藤　亜衣美	いとう　あいみ	三重バイオレットアイリス
11	CP	工藤　麻衣	くどう　まい	ソニーセミコンダクタ九州
12	CP	樋口　真央	ひぐち　まお	ソニーセミコンダクタ九州
13	CP	植垣　暁恵	うえがき　あきえ	広島メイプルレッズ
14	CP	東濱　裕子	ありはま　ゆうこ	オムロン
15	CP	仲宗根　彩	なかそね　あや	北國銀行
16	CP	藤井　紫緒	ふじい　しお	オムロン

#大会の準備

勝つには人が動く、ボールが動く、ハンドボールを展開しなければならないと考え、その為に「スピード」と「スタミナ」そして「テクニック」が必要だと思っています。

日本代表チームの改革ポイントとしては、戦う姿勢と勝ちに対する執念は勿論、ハンドボールに対する信念とナショナリズム（日本の文化）をしっかり持って戦うことだと考えています。

新しくスタートしている現時点では戦術・戦略をどうするかよりは、メンタル面の改革と戦える体作りが先だと考えています。

#試合結果

第1戦目のウズベキスタン戦は47対14、第2戦目のイラン戦は42対19で危なげなく勝つ事が出来ました。

格下のチームではありましたが、機動力を使った攻撃的な守りから速攻の繋ぎとアウトスペースを徹底して攻めながら相手を揺さぶる攻撃の展開も出来ていたと思います。

第3戦目のカザフスタン戦は両チーム共に決勝トーナメント進出と世界選手権の切符を確定する為の大事な試合でした。日本は守りが良く機能し、体格を生かした相手のポスト攻撃を封じる事が出来、31対23で勝つ事が出来ました。自分の中ではスタミナが切れることがなく、1時間トータルで戦えたことが大きな収穫だったと思います。

第4戦目は決勝トーナメント進出がお互いに決っている中で、予選ラウンド1位を決める試合で、宿敵韓国との戦いでしたが、結果27対39完敗でした。

技術と戦術以前の問題で、相手の前半立ち上がりのスピードと集中力、執念は計り知れない部分があり、主導権を握るような戦い方をしなければ勝てない事も確認出来た試合だったと思います。

日本は予選ラウンド２位通過で、Ｂ組１位通過の中国との準決勝でした。予選ラウンドを比較的弱いチームに大差で勝ち進んで来ている中国に対して、立ち上がりから攻撃的でハイテンポの試合運びで、一気に主導権を握って勝負付けることを意思統一してゲームに入りました。前半は14対12でリードして折り返しましたが、後半逆転され28対29、惜しくも１点差で負けてしまいました。

内容としては前半良い流れで試合を運びましたが、後半に入ってからは相手の５－１変則ディフェンスを攻め切れない時間帯があって、守って速攻の展開でパスミスが目立ち、相手に息を吹き返させる結果となりました。後半途中までは素晴らしい機動力で戦っていても最後のスタミナ切れがあり、相手に突き放される事が日本の課題でもありました。

しかし、この試合では残り２秒での痛い失点で１点差負けはしましたが、残り３分で４点差負けていたところから最後まで諦めないでボールを奪い、同点まで持ち込んだことに対しては、スタミナ面での改善も含めて明るい材料を得ることが出来たと確信しています。

３位決定戦は地元のタイとの試合でした。地元の応援があって審判の判定の部分もやや心配もありましたが、危なげなく39対16で勝つことが出来ました。

最後の試合を勝利で飾ることが出来てよかったですが、決勝の舞台に選手たちを立たせなかったことについては大変悔やまれますし、選手たちには申し訳ない気持ちです。

#今後について

ロンドンオリンピックに向けて、他国は世代交代が進んでいました。その中で、カザフスタンには勝ちましたが、韓国と中国に勝てなかったことに対して大変危機感を感じています。

まずはコートの中に立っている選手たちが、相手に負けないような闘争心を強く持たなければ勝負にならないと思いますし、攻守において個々の１対１の強さがなければ通用しないことも再確認した大会だったと思います。しかし、スタミナ強化を中心にトレーニングをして来た成果は感じましたので、その部分においては自分の中では評価出来ると思います。

監督として今回他国の戦術・戦略に対してどう立ち向かっていくのかを研究して、選手たちに明確なビジョンを出したいと思いますし、その後は戦術の徹底が必要だなと強く感じています。選手たちは変わろうとしていますし、変わらなければ厳しい１点勝負には勝ってないと思いますので、これからも必要なテクニックを身に付けながら皆と一緒に勝利に向かって頑張りたいと思っています。

色々とご協力して頂きました各チーム関係者、及びに佐久間ドクター、高野内トレーナーにも感謝しています。

一歩一歩前進しながら強い日本チームになりたいと思いますので、女子日本代表チームのご声援を宜しくお願い申し上げます。

戦　評

▼予選リーグ

日　本　47（21－3、26－11）14　ウズベキスタン

「初戦ウズベキスタン日本完勝」

初戦ウズベキスタン戦。日本は立ち上がり、相手６－０ディフェンスに対し開始１分20秒、東濱の鋭いカットインで日本が先制点をあげ、立ち上がりの緊張感の中で積極的な攻撃を展開する。藤井のカットイン、城内、坂元の速攻、上町の７ｍスローで連続得点し、開始５分で５対０と理想的な展開となる。ディフェンスでもウズベキスタンの高さに対し積極的にバックプレーヤー、ポストプレーヤーをチェックすることで、ディフェンスに機動力が生まれ、ウズベキスタンに得点のチャンスを与えない完璧なスタートを切った。その後、６分40秒に上町の退場により、ウズベキスタンに７ｍスローによる得点を与えるが、日本はオフェンスでも足が動き、日本の多彩な、また足を使った攻撃にウズベキスタンは対応できず、藤井、東濱のミドルシュート、伊藤亜の速攻、坂元のポストシュート、退場が解けた上町の７ｍスローと連続得点を上げ、15分には10対２と有利に試合を進め。その後も攻撃の手を緩めることなく、速攻、サイドシュート、ミドルシュートと得点を上げる。ディフェンスでは、ウズベキスタンの大きさ・高さに対し退場者を出し、７ｍスローのチャンスを与えるが、GK飛田のファインセーブもあり、前半はウズベキスタンに対し３得点しか許さないまま、21対３の日本リードで折り返した。

後半も、佐久川に替わって入った伊藤瞳のサイドシュート、城内に替わって入った工藤と両サイドの速攻を中心に、センター樋口の速攻、カットインとバランス良く得点を重ねていく。ウズベキスタンは逆にダブルポストによる攻撃でオフェンスでの展開を変えてきたが、日本ディフェンスは素早く対応し単発での得点を許すのみで、ウズベキスタンに連続得点を許すことなく、後半も26対11、トータル47対14と終始日本ペースで試合が進み、アジア選手権予選グループ１勝をあげる。試合展開としては、日本が目指すディフェンスでの強い当たり、オフェンスのスピーディーな展開がいい流れをつくり理想的な試合であった。

【個人得点】樋口8、上町・巻・伊藤瞳・工藤・東濱5、城内4、伊藤亜・藤井3、佐久川・坂元2

日　本　42（21－8、21－12）20　イラン

「日本２連勝」

初戦に続き２戦目も、日本は６－０ディフェンスでイランの攻撃の特徴であるカットイン、ポストプレーを封じ、ディフェンスから速攻につなげる。セットオフェンスでは早いパス回しから走りこみ、東濱・藤井のミドルシュートやロングシュート、またディフェンスを引き付けて城内、佐久川の両サイドシュートで５連続得点を奪う。その後、イランに単発

でのシュートや、坂元の退場の間に得点を与えるが、坂元の退場が解けた後はディフェンスが足を使ってイランの攻撃に対応。イランに得点を与えず、日本は8連続得点を上げるなど、日本ペースで試合が進む。日本がメンバーチェンジしたあたりでディフェンスでの連携ミスや退場者が出てイランに3連続得点を許す場面があったが、前半を21対8で折り返す。

後半立ち上がり、シュートミス・テクニカルミスの連続で、イランにブラインドシュート、ロングシュートの連続得点を許す。しかし5分過ぎ、日本もディフェンスを立て直し、イランのイージーミスを全て速攻につなげ、巻・藤井・樋口・工藤・伊藤亜による8連続得点で後半も主導権を握り点差を離しにかかる。16分過ぎ、巻・上町と連続退場で4人となるが、その間イランの攻撃を1点に抑え、仲宗根の7mスロー、伊藤瞳のサイドシュート、工藤の速攻で日本は加点していく。後半残り10分、イランもセンター№6を中心にブラインドシュートによる得点で加点していくが、日本は初戦に続き大差で勝利を収めた。

【個人得点】伊藤瞳6、佐久川・上町・城内・工藤・藤井4、巻・東濱・仲宗根・樋口3、伊藤亜2、坂元・田代1

日　本　31（15－9、16－14）23　カザフスタン

「カザフスタンに勝利し、世界選手権出場権獲得！」

今日のカザフスタン戦はグループリーグ2位以内を確保するためにも重要な試合である。前半立ち上がり、カザフスタンに連続得点を許すが、ディフェンスで足を動かしての機動力を最大限に使い、その後の得点を許さない。その間に日本は落ち着いた攻撃を展開し、5分過ぎ、東濱・藤井のコンビからのカットイン、佐久川のサイドシュートですぐに同点に追いつく。11分過ぎには東濱のカットイン、坂元の速攻、上町の7mスロー、藤井のロングシュートなどで5連取。その後、上町の退場の際に得点を許すが、日本も反撃し、一進一退の攻防が続く。25分過ぎ、日本はこの日、オフェンスで調子がいい東濱・藤井を軸に攻撃を組み立て、連続得点を奪い、前半を15対9と6点差で折り返す。

後半も日本はディフェンスの動きがより活発になり、注意すべきカザフスタンの攻撃をディフェンスの粘りと、GK勝田のファインセーブで試合をしっかりと組み立てる。後半中盤には、藤井・佐久川らで貴重な時間帯に連続得点を上げる。カザフスタンも攻撃をダブルポストに変え攻撃の糸口の変化を試みるが、日本はしっかりとしたディフェンスの対応ができ、得点は許すものの連続得点を取られない粘りの守りを見せる。21分過ぎには、代わって入った植垣のカットインから、東濱のカットイン、城内の連続サイドシュート、伊藤のサイドシュートで一気にカザフスタンをたたみ掛け、試合を決めた。

この試合、ディフェンスではセンター坂元・東濱を中心に伊藤亜・上町・佐久川・城内の機動力とGK勝田の活躍が、オフェンスでは藤井・東濱の活躍はもちろん、チーム一丸となって闘い、全選手の勝利への執念で得た勝利と言える。この試合の結果により日本はAグループ2位以内を確定し、また2009世界選手権開催国・中国がBグループ2位以内を確定したので、中国を除いた上位3チーム以内となり、世界選手権の切符は確実となった。

【個人得点】藤井8、東濱6、城内5、佐久川4、坂元3、樋口2、上町・植垣・伊藤瞳1

韓　国　39（22－11、17－16）27　日　本

「前半立ち上がり10分の課題」

前半立ち上がり、日本は韓国6－0ディフェンスに対し早いボール回しからポジションチェンジによる攻撃を展開する。しかし韓国ディフェンスを崩すことができず不利な位置からシュートを打たされる間に、韓国は速攻を中心に、№20のロングシュートなどで4連続得点を上げる。なかなか日本はディフェンス、オフェンスでリズムを掴むことができず、3分過ぎに坂元のポストシュートで1点目を取るが、その後の攻撃も連続得点を奪うことができず、韓国に追加点を許してしまう。韓国は1対1を中心に攻撃を展開、日本のアタックディフェンスに対し早いパス回しでサイドまでボールを運び得点を上げていく。日本はポジションチェンジによる攻撃を展開したが攻撃が、センター中心となり、アウトサイド攻撃ができず得点が取れない。そのまま前半11対22のダブルスコアで折り返す。

後半、日本は東濱のロングシュートで得点を奪うが、韓国オフェンスの1対1を止められず、先手を奪うような昨日までの機動力を活かしたディフェンスができない。攻撃では、センター中心の攻撃からアウトサイド攻撃で徹底して攻め、カットインが多くなったところで得点は取るものの、韓国にも得点を許してしまう。15分過ぎ、上町のカットイン、7mスローとこの試合始めて連続得点を奪った。また、韓国ディフェンスに退場者が出たことによりオフェンスでは有利に攻撃するが、韓国5人のオフェンスでも得点を許し点差を詰めることができないまま、27対39で試合が終えた。前半の立ち上がりの攻防がこの試合を決めてしまった。

【個人得点】上町8、東濱5、伊藤亜・佐久川・藤井3、城内・植垣・坂元・樋口・巻1

▼準決勝

中　国　29（12－14、17－14）28　日　本

「後半に逆転を許し、残り2秒で勝利を逃す」

中国との準決勝、日本は韓国戦の反省から前半立ち上がり、積極的なディフェンス、オフェンスにより植垣・藤井のロングシュートで連続得点を奪う。中国も高さを利用したポスト攻撃、ロングシュートを中心に攻めてくるが、GK勝田のファインセーブもあり連続得点を許さない。前半12分、坂元の退場により中国に連続得点を許す。中国はここで日本の攻撃リズムを崩そうとオフェンスの中心である藤井に対しマンツーマンを仕掛ける。しかし日本は広くなった中国ディフェ

ンスに対しアウト攻撃を展開し、城内の連続サイドシュート、佐久川のサイドシュート、速攻でリードを保ち前半を14対12の2点差で折り返す。

後半も中国は藤井にマンツーマンディフェンスで守るが、日本は伊藤の速攻、上町の7mスローによる得点でリードする。しかし中国オフェンスの強引な攻めに対し日本はディフェンスで守りきることができず退場者を出す。その間に中国は、サイドシュート、速攻、7mスローと連続得点で同点に追いつく。その後、日本は得点は取るものの、要所で退場者を出し、15分過ぎに逆転を許す。中国ディフェンスに退場者が出たところで日本も得点を奪い同点となるが、19分過ぎに中国のステップシュート、カットイン、ロングシュートと4連続得点を許し、試合の主導権を中国が掴む。25分過ぎ上町の退場の間に、オフェンスでのテクニカルミスにより中国に速攻で2連続得点を許す。日本は残り時間2分、3点差の場面で、マンツーマンディフェンスで中国にプレッシャーをかける。相手ミスを誘い、28分伊藤亜の速攻、28分20秒上町の速攻、29分20秒坂元のポストシュートによる連続得点で1点差に。残り時間20秒で中国の攻撃を上町がインターセプトから単独速攻に持ち込み同点に。しかし残り時間8秒、最後は中国サイドの№2がサイドシュートに持ち込み、残り2秒で得点を奪われ、1点差の28対29で試合終了となった。

【個人得点】上町・佐久川5、城内・東濱4、植垣・藤井・伊藤亜・坂元2、樋口・巻1

▼3位決定戦

日　本　39（20－11、19－5）16タ　イ

「タイに勝利し3位決定」

地元・タイとの3位決定戦。前半、日本は6－0ディフェンスでしっかりとタイの攻撃のリズムを崩し、佐久川、城内の両サイドの速攻で確実に得点を奪い、開始10分で8対2とリードを奪う。その後、タイも№6のポストを中心に攻撃を組み立て得点をするが、連続得点を奪う事ができず。攻撃でのテクニカルミスを日本は坂元、上町、佐久川の連続速攻で得点し、タイを突き放す。

後半に入っても日本はディフェンスで良く足を動かし、タイに得点チャンスを与えることなく、替わって入った仲宗根、巻、工藤、伊藤瞳を中心に速攻だけで得点をあげる試合展開となる。後半に至っては、5分過ぎの4連続得点、9分過ぎの3連続得点、19分過ぎの5連続得点と得点をあげる。タイは消極的な攻めになり日本の攻撃だけが目立つ一方的な試合展開となり、最後は6連続得点で試合を終了。結果的には前半の立ち上がりでリズムにのった日本の圧勝といえる試合であった。

この結果、第12回女子アジア選手権は3位となった。

【個人得点】上町・城内6、坂元・工藤5、伊藤瞳4、巻・仲宗根3、佐久川・東濱・藤井2、樋口1

日本ハンドボール協会感謝の集い兼女子アジア選手権壮行会〈報告〉

「日本ハンドボール協会感謝の集い兼女子アジア選手権壮行会」が、2008年11月17日（月）16：00－18：00、東京都北区西が丘のナショナルトレーニングセンター研修室にて開催されました。

メインスポンサーの全日本空輸（株）、（株）アシックスをはじめとするスポンサー各社、JOCなどの関係団体、マスコミ各社、日本リーグチームのオーナー・GM、女子日本代表、男子日本代表（4名）、日本協会役員など総勢90名余に集まって戴きました。

冒頭、渡邊会長から挨拶として、「中東の笛」から発した国際問題の収束に至る説明とお礼から会が始まりました。

来賓のご挨拶として、水野正人JOC副会長から暖かいお言葉を戴いた後、小野清子日本スポーツ振興センター理事長の発声で乾杯の後、歓談と移っていきました。

会半ばに、お世話になっている協賛各社に対し感謝状が市原副会長より授与されました。そして一番最後に、テレビやその他メディアに多く出て、ハンドボールの普及発展に多大に貢献した宮﨑大輔選手が表彰されました。



宮﨑大輔選手と市原副会長

次に、北京オリンピック後初めての国際試合となる第12回女子アジア選手権の選手団が紹介され、福田富昭JOC強化本部長より激励の言葉が述べられ、激励金が手渡されました。これを受け、西窪勝広団長よりお礼がありました。会場には、田中茂NTC専任コーチが編集した北京五輪予選敗退の悔しさを忘れないためのDVDが流されて、来会者の注意を引いておりました。

中締めとして川上憲太専務理事よりお礼の挨拶があり、ひとまず会はお開きとなりました。


選手団に激励の言葉をいただいた福田JOC強化本部長


お礼の挨拶をする西窪団長

～指導者の嘆き～

企画・広報委員
早川　文司

フリースロー
Free Throw

「学校との関係は難しいですね。うまくやりたいけど…どうすればいいか、本当に真剣に悩んでいますよ」

昨年末、ある会合で聞いた熱心な指導者の苦悩である。

この人は、クラブを立ち上げ、小・中学生を指導している。「何とかハンドボールをメジャーに」の強い思いを秘め、熱いハートで“将来日本を背負う金の卵”育成に並々ならぬ情熱を燃やしている。

しかし、練習のスケジュールがなかなか思うように組めないもどかしさを感じている。学校の協力が得られないのも一つの要因だと言う。

学校体育におんぶに抱っこで発展してきた日本のスポーツ界。容易に脱出するのは難しい問題である。クラブとして学校の部活とどのように住み分けていくかは、今後のスポーツ界にとっては、避けて通れないテーマであることは間違いないところである。各競技共通の課題であろう。

日本のスポーツ界は今、転換期にあると言えよう。米国発の金融危機によって、実業団もこれまでのように安閑としてはおれない危機感につきまとわれている。今後、主流はクラブに移行することは十分に想像できる。

こうした状況を見る時、熱心さ、情熱で支えられている現在のクラブへのサポートは欠かせないところである。また、悲願のオリンピック出場を果たすためには、トップの強化と合わせてジュニア層の育成は避けられない。「すそ野」の広がりがあってこそ、頂点のレベルアップも図られるはずである。

小学生時代からハンドボールに親しませ、中・高校生から大学、そしてトップアスリートへと導くシナリオを描くためにも、それぞれの地域でのクラブ育成、サポートは欠かせないのは明らか。

学校依存からの脱皮には地方協会の充実しかない。日本協会の指導の下、地方の存在をもっと強力にあと押しすることが求められる。ジュニア層充実をいっそう重要視して、地域のパワーを取り込み、日本の基盤としての認識をもっと深めるべきだと思う。

クラブの指導者がいくら頑張っても限界はある。そこを地域が組織を挙げて支えることになれば、これほどうれしいことはない。最強の基盤づくりは地方にあると言っても過言ではなかろう。指導者が思う存分働け、嘆くことのない球界であってもらいたい。

ドクター・水素水 ——— 特殊セラミック＆エンバランスTスティック

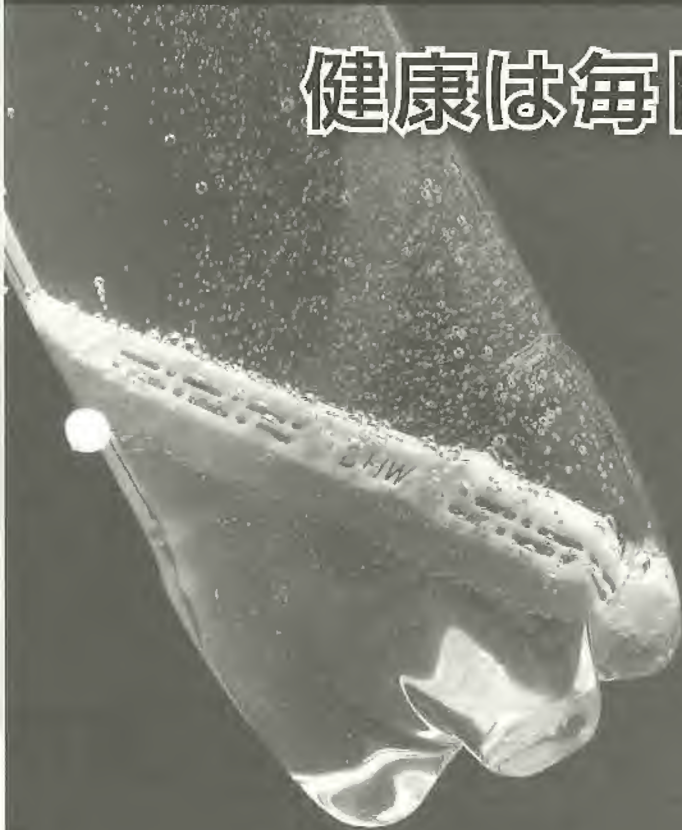
簡易型水素発生「生」水器（水素発生ミネラルスティック）

豊富な水素が　水を変える！

フレンディアはJADMA（日本通信販売協会）の正会員です。

JADMA
社団法人日本通信販売協会会員

健康は毎日の飲料水から…



※本製品は改良のため予告なく仕様・デザインを変更する場合があります。



500mlのお水にドクター・水素水スティック１本を投入。
約120分後、水温21度における容存水素量0.48ppm。（当社測定値）

日本医学交流協会医療団
（ＮＰＯ認証　東京都）



当商品は認定を受けています。
http:/www.drp.ne.jp/で認定確認できます。

特許公開番号：2004-41949
韓国特許登録：529006号
米国特許番号：7189330

・原材料／金属マグネシウム、天然石
サイズ／19×132mm



価格／1箱4本入り 13,440円（税込み）

水の入ったペットボトルなどの容器にスティックを入れるだけ。
2リットルの水道水にこれ１本！
しかも**6ヶ月と長持ち**です。
１日2リットル作ったとして、
たったの24円と経済的。



株式会社フレンディア

〒107-0062東京都港区南青山5-10-13 デコパージュ南青山4F
TEL:03-5948-5011　FAX:03-5948-5263
フリーダイヤル 0120-372-132（みんなに いーみず）

株式会社フレンディアのウェブサイトを併せてご覧ください。

http://www.dr-suisosui.com

2008 U−16 女子
日韓ハンドボール親善大会交流事業

U-16 女子監督　石塚 廣一

派遣

12 回目となる日韓スポーツ交流、U − 16 女子のハンドボール事業は、11 月 16 日韓国ソウルへの訪問から始まりました。11 月 17 日は予定通り、午前中合同トレーニング、午後テストマッチとして行われ、日本チームは韓国にて初めて汗を流してのトレーニングとなりました。やや堅さと体の不具合は感じながらも徐々に本来の動きが出てきていたように思われます。14 名の選手を 2 チーム編成とし、それぞれに役割と日の丸の重さを感じさせながら、和気藹々の中に緊張感を保ち、それぞれのチームの持ち味が現れていたと思います。

DF システムは将来的な展望も含め、海外諸外国チームとの対戦する時を想定しての、3 − 2 − 1、3 − 3 など、高いゾーンでのシフトでトライアルさせました。かなり厳しい局面や課題は残すものの、攻撃的守備という点からも得たものは多かったと思います。韓国側は、16 名の選手すべて中学 3 年生（8 チームからの選抜）で構成し、体格的には例年ほど大きさを感じませんが、その持ち味であるステップワークの強さ、パスワークの速さ、スピィーディーなゲーム展開は日本チームにとってかなりの参考材料となりました。

今回の日程で残念であったことは、11 月に日程が変更となり、日本チームの選手たちの日程にかなり無理が生じてしまったことでした。ただし、各チームの監督さんたちの配慮で無事に日程をこなせるようになりました。

トレーニング第二日は予定通り親善試合を決行、残念ながら前半の点差が響き、17 対 24 で負けてしまいますが、後半では先に述べた DF システムが機能し速攻で 3 点連取するような場面や相手を退場させることもあり、かなり奮起しました。今後、後期の受入に向け攻撃のコンビネーションを持ち合わせ、個々のテクニックと訪韓で培ったチームワークで、確実に得点力アップが期待できます。大いに期待できる楽しみなチームとなりました。

日本ハンドボール協会担当者・諸団体各位、韓国側の団長はじめコーチングスタッフ及び通訳とその父親らの心温まる持て成しと歓迎ぶりに感謝申し上げ、前期訪韓の報告とさせていただきます。ありがとうございました。

2008 全日本女子 U − 16 日韓スポーツ交流選手団名簿

役　職	氏　名	ふりがな	所属先
団　長	角　紘昭	すみ　ひろあき	日本ハンドボール協会
監　督	石塚　廣一	いしづか　こういち	日本ハンドボール協会
コーチ	細津　誠	ほそつ　まこと	日本ハンドボール協会
コーチ	尾石　智洋	おいし　ともひろ	日本ハンドボール協会
コーチ	古橋　幹夫	ふるはし　みきお	日本ハンドボール協会
トレーナ	嶋原　暢子	しまばら　のぶこ	パンジョスポーツクリニック
通　訳	蘇　美子	そ　みざ	

No.	氏　名	ふりがな	在籍高校	ポジ
1	渡邉　江里子	わたなべ　えりこ	文化女子大杉並高等学校	GK
2	田邉　早紀	たなべ　さき	洛北高等学校	CP
3	高宮　咲	たかみや　さき	文化女子大杉並高等学校	CP
4	足立　未奈	あだち　みな	文化女子大杉並高等学校	CP
5	中村　光代	なかむら　みつよ	文化女子大杉並高等学校	CP
6	小島　朋子	おじま　ともこ	仁愛高等学校	CP
7	濱崎　紗世	はまざき　さよ	小松市立高等学校	CP
8	林　るうな	はやし　るうな	名古屋市立向陽高等学校	CP
9	竹下　佳慧	たけした　よしえ	四天王寺高等学校	CP
10	角南　果帆	すなみ　かほ	洛北高等学校	CP
11	山根　瑠美	やまね　るみ	華陵高等学校	CP
12	田中　友惟	たなか　ゆい	国分高等学校	GK
13	宮本　夏澄	みやもと　かすみ	松橋高等学校	CP
14	水田　亜莉沙	みずた　ありさ	四天王寺高等学校	CP
15	渡井　渓	わたい　けい	四天王寺高等学校	CP

宮本夏澄は韓国受け入れ時のみ出場
角南果帆は韓国遠征のみ出場

【試合内容報告】

① 11 ／ 17　テストマッチ 25 分ゲーム× 2（貞信女子高等学校体育館）

日本　11 − 14　韓国

日本　8 − 14　韓国

② 11 ／ 18　親善試合 25 分ハーフゲーム（貞信女子高等学校体育館）

日本　17（7 -12、10-12）24　韓国

（田邉 1　高宮 1　足立 1　中村 3　小島 1　濱崎 3　竹下 2　角南 1　山根 1　水田 2　渡井 1）

③ 11 ／ 20　テストマッチ（テヌンオリンピックセンター）

日本　20（12-10、8-12）22　韓国

受入



U－16女子のハンドボール受入事業は、12月1日東京都ナショナルトレーニングセンターにて初めて実施しました。交流日程は予定通り、12月2日の午前中合同トレーニング、午後テストマッチとして行われ、日本チームは韓国を迎えての初めての合同トレーニングとなりました。日本チームは1名の入れ替えがありましたが、前日のトレーニングとこの時期の所属チームでの公式戦後ということもあり、例年よりコンディションがいいように感じました。特に、ナショナルトレーニングセンターでの環境の良さは強く感じるものでした。14名の選手全員にポジションを与え、そのモチベーションと責任感を引き出せることを優先し、短期間でもチームの雰囲気は大変よかったと思います。

DFシステムは訪韓時同様、諸外国チームとの対戦する時を想定しての3－2－1、3－3、さらに相手のオフェンス変化に対応すべく4－2など、高いゾーンでのシフトでトライアルさせました。選手を交替させていく中で課題は残すものの、攻撃的守備は今回もかなり自信になっていたと思われます。それに対して韓国側は、1対1を中心に突破を図ってくる戦術と瞬間的にシフトを変化させる戦術で対抗してきました。交流途中に日本チームの2名が練習試合にて怪我を負いその後の活動ができなくなりました。この日のミーティングから各選手の勝ちたいという気持ちが伝わってきました。ステップワークの速さ、スピーディーなゲーム展開やボールに対しての執着は、日本チームにとってかなりの参考材料となりました。

トレーニング最終日は予定通り親善試合を実施、前半は相手にリードを許すものの徐々にディフェンスシステムが機能し、全員出場させながらも11対8で折り返しました。後半ではそのDFシステムにやや足がついていかなくなりました。1対1からのカットインや速攻といった形で逆転され、大きく引き離される形となり結局20対27で韓国に惜敗しました。



途中での選手の負傷に対して速やかに対応していただいたナショナルトレーニングセンタースタッフのみなさん、試合前にアドバイスしていただいた日本ハンドボール協会担当者・諸団体各位、親善試合で応援していただいた選手保護者のみなさん、さらに、コーチングスタッフ所属長様やその所属の職員の皆様にも感謝申し上げます。

今回のような機会を与えていただき、誠に、ありがとうございました。

【試合内容報告】

①12／2　テストマッチ25分ゲーム×2（ナショナルトレーニングセンター）

日本　12－10　韓国

日本　9－16　韓国

②12／3　テストマッチ25分ゲーム×2（ナショナルトレーニングセンター）

日本　20（5-15、15-11）26　韓国

③12／4　親善試合25分ハーフゲーム（ナショナルトレーニングセンター）

日本　20（11-8、9-19）27　韓国

（田邉1　高宮3　足立4　中村5　濱崎1　林1　宮本3　渡井2）

報 告

高嶋 洌先生を偲ぶ会

昭和29年～41年まで、日本ハンドボール協会の理事長をされていた高嶋洌先生を偲ぶ会が、平成20年11月22日（土）「こまばエミナース（東京・目黒区）」で100名を越す出席の中開催されました。会場入場時に出席者1名1名が会場中央に置かれた遺影前に献花を行い、会は厳かに始まりました。最初に、先生のご冥福を祈り黙祷が行われ、その後、ご親族、会の発起人が紹介されました。引き続いて、発起人を代表し日本体育会元理事長の上平雅史様より、高嶋先生のひととなりと偲ぶ会を開催する経緯が披露されました。その後、特に先生とご縁のあった３名の方からお別れの言葉を戴き、渡邊佳英日本ハンドボール協会会長の発声により献杯が行われ歓談となりました。



黙祷



藤田八郎様　挨拶



上平雅史様　挨拶



お礼の挨拶（全体）

歓談中には、高嶋先生の奥様からお預かりした想い出の写真が会場内のスクリーンに映され、更に経歴も紹介、改めて高嶋先生が偉大であった一方、家庭人でもあったことが偲ばれました。

参加された皆様は、ご親族とともに旧交を温められ、昔話に花が咲きました。最後に、親族を代表され、ご長男の高嶋信様、ご令室高嶋秀子様から、お礼の言葉が述べられ、会はお開きとなりました。

呼吸する建築







Swindow●スウィンドウ
わずかな風圧も捉えて自然に開閉し、室内外の温度差で効率の良い換気が行えるバランス式逆流防止窓。



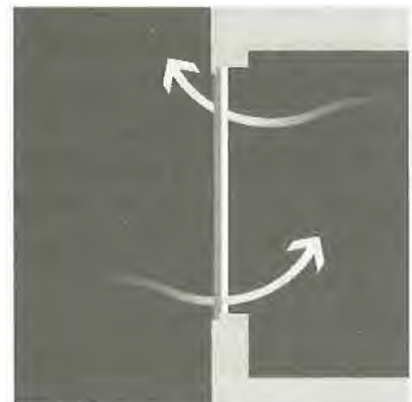




Wincon●ウィンコン
内蔵の調節弁により、風の強弱に影響を受けにくく、定風量で換気が行えるヨコ型定風量換気スリット。







Cavcon●キャブコン
内蔵の調節弁により、強風時でも一定の風量で換気ができ、無風時でも内外の温度差による重力換気が行えるタテ型定風量換気スリット。

NAV WINDOW 21

「呼吸する建築」。それは人が呼吸をするように
建築が自然に空気を取り入れ、建物内部の空気を新鮮に保ち
不要なものを排出するシステムを持つことです。
自然換気システム＝NAV WINDOW 21は
これまでの建築の機械空調と共存し
建物を取り囲む風を読み、建物内に風の道を作りそれを状況の変化に
あわせて制御する画期的な換気システムです。

三協立山アルミ株式会社
東京本社／〒164-8503 東京都中野区中央1-38-1
住友中野坂上ビル20F〈環境商品部〉 TEL (03) 5348-0367
インターネットホームページ http://buildingsash.net/

平成20年3月15日・16日の両日、駒澤大学において、第6回ハンドボールコーチング研究会が開催されました。本研究会は、全国の指導者が自身の経験や・知見を持ち寄り、実際の現場で有用な情報を共有する機会として位置付けられています。

研究会の発表内容については、本誌で連載報告していただく運びとなりました。

今月は清水宣雄先生（国際武道大学）の発表内容「学生トップチームの戦術プレイに関する考察」を報告させていただきます。なお、他の発表については次号以降で報告を連載いたします。

(財)日本ハンドボール協会指導委員会研究部会　舎利弗　学（学校法人福島高等学校）

学生トップチームの戦術プレイに関する考察

清水宣雄（国際武道大学）

キーワード：学生トップチーム、戦術プレイ、パス回数

1．はじめに

大谷武一氏が1922年にハンドボールを伝えて85年、2007年ほどハンドボールがマスコミに注目されることは無かった。北京オリンピック・アジア予選における、「中東の笛」と呼ばれる不公正な判定を巡り、国際ハンドボール連盟総会において、前代未聞となる予選のやり直しが決定され、韓国との代表決定戦に一万人を上回る観客が動員された。

残念ながら韓国に敗れ、代表権を得ることはできなかったが、ハンドボールの認知度を向上させる千載一遇の好機を活かすためには、他の球技に優るとも劣らない、ハンドボールの「おもしろさ」を再確認し、世間一般に訴えていく必要があると考える。

ハンドボールの「おもしろさ」は多彩であり、見解を統一することは困難であるかもしれない。しかし、より効果的に訴えていくためには、強調するべきものを絞り込み、ハンドボール界全体で推し進める必要がある。

即ち、指導者はそのプレイを教え、プレイヤーはそのプレイに磨きをかける。ベンチはそのプレイが出現するような戦術を組み立て、レフェリーはそのプレイを引き出すような笛を吹く。そのような姿が望ましいものと考える。

その実現のためには、ハンドボールの「おもしろさ」について、早急に活発な議論がなされなければならない。本研究はその議論の口火として、話題を提供するものである。

(1) 一対一の攻防局面

「ハンドボールの基本は、一対一の攻防である。一対一が突破できれば、隣のディフェンスを引き付け、数的優位を作ることができる。一対一を守ることができれば、ノーマークでシュートを撃たれることはない。」という意見がある。

一見、非の打ち所の無い考えであるが、一対一の攻防能力に劣るプレイヤーは、どうすれば良いのであろうか。

また、次のような指導を目にすることがある。「一対一だろう。なんで抜けないんだ。」「一対一だろう。なんで守れないんだ。」自チームのプレイヤーには、絶対に、抜くこと・守ること、を求め、相手プレイヤーは絶対に、守れないこと・抜けないこと、が前提となっている。正に矛と盾、矛盾する話ではないだろうか。

そもそも、一対一の攻防局面を、ハンドボールの「おもしろさ」として訴えた場合、他の球技に対抗できるのであろうか。同じゴール型球技である、バスケットボール、サッカー、と比較してみたい。

ハンドボールの一対一の攻防局面において、攻撃プレイヤーがボールを失うのは、非常に希である。一方、上記の球技においては、一対一の攻防局面において、攻撃プレイヤーは常に、ボールを失うリスクを抱えてプレイしている。

そこに、リスクが在るからこそ、スリリングな展開に、観客は一喜一憂するのではないだろうか。

(2) 戦術プレイの展開

ゴール型球技においては、集団的技能が重要視され、学習指導要領においても、作戦を生かした攻防を展開することが求められている。

しかし、バスケットボール、サッカーにおいては、ボールの扱いに高度なスキルが必要とされるため、戦術プレイを展開するまでに、長期間のスキル・トレーニングを必要とする。

一方、ハンドボールは、ボールの扱いが容易であることから、早い段階から戦術プレイを展開することが可能であり、より高度で多彩な戦術プレイも期待できる。

この高度な戦術プレイこそが、他の球技に対抗できる「おもしろさ」なのではないだろうか。

(3) 戦術プレイ

ハンドボールにおける戦術プレイは多彩であり、簡単に定義・分類できるものではない。そこで、本研究では、シュート局面において、ゴールキーパーに対し、有利な状況を作り出すことに限定して、分析を行った。

具体的には、ゴールキーパーに良い位置取りをさせないように、誰がシュートを撃つのか、直前まで不明にする狙いを、シュート直前のパス回数をカウントすることによって分析した。

2. 方　法

（1）分析対象

2007 年度全日本インカレにおいて、男子ベスト 4 となった大学が出場した全日本総合選手権大会の 1 回戦、

N大学　対　T自動車
T大学　対　H高校
W大学　対　ＨＣ－Ａ

の 3 試合を分析の対象とした。

分析対象の試合は、2007 年 12 月 20 日（木）駒沢体育館において行われた。3 試合共に学生チームが勝利を収めた。

（2）分析方法

対象となった試合を、コート側方高所に設置された記者席スペースより、デジタル・ビデオカメラ（Sony 社製 DCR-TRV8）にて撮影し、同時に動画データとしてコンピュータ（Apple 社製 iBookG4）に取り込んだ。

動画データをデジタルビデオ分析システム（Sportstec 社製 SportsCode GameBreaker Plus）を用いて、シュートのボール・リリース・ポイントから 5 秒間遡って、動画を抽出し、パス回数を分析した。

パス回数はレシーブ時をカウントし、ピックアップ時にはカウントしなかった。

3. 結果と考察

分析結果を図 1 から図 4 に示した。外側には得点時のシュート前パス回数を、内側には、シュートミス時のシュート前パス回数を、１２時方向から時計回りに、１回から順に表した。

シュート直前 5 秒間の、シュート前パス回数の最大値は 5 回であった。

（1）セットオフェンス時の比較

勝チームの分析結果を図 1 に、負チームの分析結果を図 2 に示した。

得点時における、パス 1 回でのシュートは、勝チームでは 14%、負チームでは 23% であった。パス 2 回では、勝チームでは 38%、負チームでは 29% であった。

これは、負チームの得点が、一対一の突破によるものが多いためであると考えられる。

（2）速攻時の比較

勝チームの分析結果を図 3 に、負チームの分析結果を図 4 に示した。

得点時における、パス 1 回でのシュートは、勝チームでは 40%、負チームでは 62% であった。パス 2 回では、勝チームでは 49%、負チームでは 19% であった。

これは、負チームの得点が、ワンパス速攻によるものが多いためであると考えられる。

セット、速攻共に、勝チームの方がパスを有効に使い、ゴールキーパーに対し、有利な状況を作り出すことで、シュート確率を向上させているのではないかと考えられる。

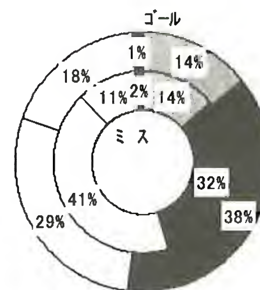


図 1　勝チームシュート前パス回数（セット）

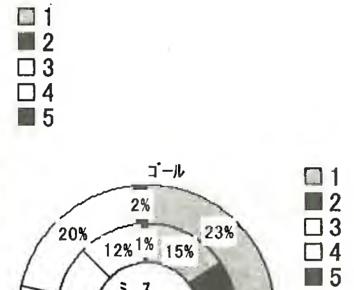


図 2　負チームシュート前パス回数（セット）

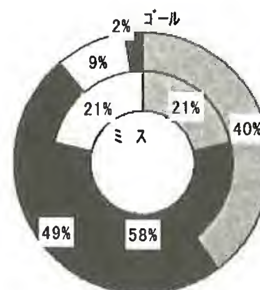


図 3　勝チームシュート前パス回数（速攻）

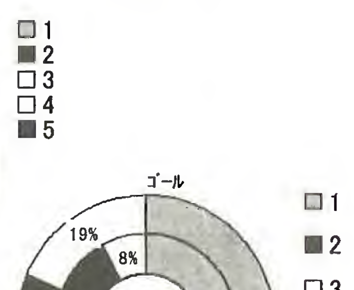


図 4　負チームシュート前パス回数（速攻）

U-19 全日本ハンドボール選手の食生活

その1　日常鍛錬期の食事摂取状況を中心に

柳田美子（順天堂大学スポーツ健康科学部）、西山逸成（医事専門委員会）

研究協力者：吉田映梨子、中川加津美、伊藤博史、川谷明子、竹内秋子（赤堀栄養専門学校）

Ⅰ．はじめに

スポーツ選手は、トレーニングの期分けなどにより食事内容が異なるために、常に栄養アセスメントを実施しながら栄養管理を行なっていくことが大切です。今回は日常の鍛錬期における食生活を中心に国際大会を目指す若いハンドボール選手を対象としてその食生活の実態を調査しましたのでご報告いたします。

Ⅱ．調査方法

分析対象者は全国より選抜されたハンドボール選手で、男子は19歳以下の大学生1人と高校生15人の計16人です。女子は20歳以下の社会人3人および大学生12人計15人です。調査は2008年5月にナショナルトレーニングセンターにおける合宿時に行いました。調査内容は16項目からなるアンケート調査（健康状態、既往歴、起床時の疲労状態、食べ物の好き嫌い、サプリメントの利用、朝食摂取、間食摂取、食事に対する関心、食生活の満足感、食品類の摂取状況、練習回数・時間、練習時水分摂取状況）および体格、握力、Hb（ヘモグロビン）・VOI（静脈酸素代謝状態）等の測定です。Hb,VOIは、末梢血管モニタリング装置を用いました。

Ⅲ．まだまだ世界と差のある体格

身長、体重、肥満度（BMI、体脂肪）は表1の通りです。身長は男子では2003年のジュニア選手や全日本男子と比較しても差はなく、1981年のヨーロッパ諸国の平均値と比較するとまだ8cmほど低い現状にあります。女子においては1987年の日本における同年齢層と比較して大差はありませんでした。ハンドボールの世界では190cm（男子）が普通といわれるこの頃です。本対象者では男子の身長は最高で188cm、女子は175cmであり、世界で対等に競技するためには、体格をカバーする強いパワーと筋力が必要です。表2に握力、ヘモグロビン値等を掲げましたが、生理的にみてもヘモグロビン値が標準値以下である選手が男子では3人（20%）、女子では2人（13%）みられました。ヘモグロビン値が低いことは、疲労や息切れを起こしやすく、早急に改善する必要があります。

Ⅳ．練習に工夫を

健康状態は「非常に健康、まあ健康」という選手が男女とも87%を占めていました。日常の練習回数・練習時間は男子では週7日間が68.8%を占め、女子は6日間が73.3%で、1日の練習時間は3～4時間が殆どでした。学業との両立での練習時間には自ずと制限があります。トレーニングのねらいを絞って重点的に行うことが効果的であるといわれています。

Ⅴ．食事はトレーニングと同格に

食事への関心は食事に「気をつけている」という者は男子では67%、女子では27%でした。高校生の多い男子チームより大学生の多い女子チームに食事を意識せず摂取している者の多いことが伺えます。ハンドボールに必要な体力、すなわち、筋力、敏捷性、瞬発力、持久力、柔軟性、調整力など多くの要素が求められます。したがって、技術だけではなく、これらの諸要素を向上させなければなりません。体力や技術の向上には毎日の食事が左右するといっても過言ではありません。そこで、実際の日常の食事の状況を見てみましょう。

1．朝食・食品類の摂取状況：朝食は毎日摂取する者が殆どでしたが、時々欠食する選手が男子では25%、女子では20%みられました。朝食は、1日の出発点でもあり、身体を調整する上からも欠くことのできないものです。朝食の欠食は、その不足分を昼と夕と間食で補う必要があります。たくさんの栄養素が必要な選手にとっては朝食の欠食は体力ダウンにつながります。本調査では11項目の日常の食品類の摂取状況について、「殆ど毎日食べている」、「週に3－4回食べている」、「ほとんど食べない」の3段階で尋ねた結果、図のように「殆ど毎日食べている」という食品は肉類、卵類、油脂類であり、反対にあまり食べていない食品は海藻類や大豆製品、芋類でした。この傾向は一般の大学生と同様であり、洋食嗜好が窺われます。

2．サプリメントの利用状況：利用者は男子25%、女子20%であり、その種類はプロティンやミネラル類でした。この摂取状況はスポーツ系大学生と同程度の摂取割合でした。

3．間食：男女とも80%が摂取しており、その内容は男子ではおにぎりやパン等であり、女子はチョコレートなど菓子類の摂取の多いことがみられました。スポーツ選手の間食は食事の一部と考えた方が望ましく、甘い菓子類も少しであ

表１　ハンドボール選手の体格　―過去および諸外国との比較―　　（M：中央値、SD：標準偏差）

男子	本調査ジュニア		2003 年ジュニア		2003 年全日本男子		1981 年	ヨーロッパ	ロシア
	15 人		16 人		36 人		日本	諸国平均	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	M	M
身長　cm	180.3	6.3	182.8	6.5	182.8	6.6	181.8	188.5	190.6
体重　kg	74.3	7.6	78.9	7.3	84.5	8.8	—	—	—
BMI	22.8	1.8	23.6	1.2	25.2	1.7	—	—	—

女子	本調査ジュニア		1987 年ジュニア	
	15 人		15 人	
	M	SD	M	SD
身長　cm	168.4	5.3	165.8	6.0
体重　kg	64.7	6.9	60.4	3.8
BMI	22.7	1.6	22.0	10.2

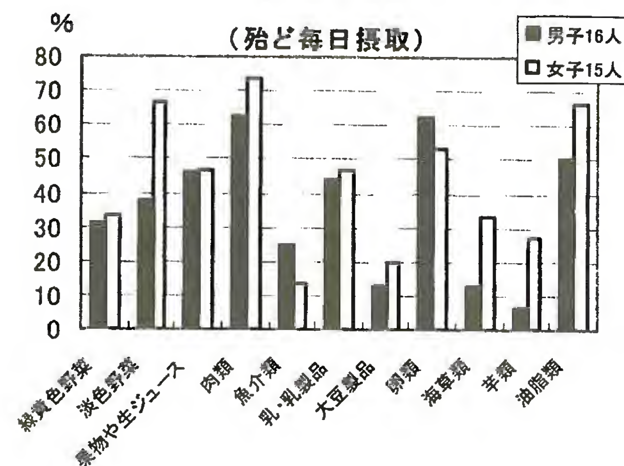
1981、1987、2003 年データは「ハンドボール競技のスポーツ医・科学研究、1996、2006 年」より

表２　性別　握力・生化学検査の状態

	男子　15 人		女子　15 人	
	M	SD	M	SD
握力　右　kg	51.7	9.1	36.5	5
左　kg	49.3	7.9	32.3	5.4
ヘモグロビン値 g/dl	14.4	1.2	12.9	1.2
静脈酸素化指　%	-67.1	10.7	-62.4	8.1

注）標準ヘモグロビン値：M：13-1g/dl　F:11.5 － 16.5g /dl
　　標準　静脈酸素化指数：-50 ～ -80%

図　性別食品類の摂取状況



ればホッと一息入れる時に疲労回復になります。

４．食事バランス度と食生活・意識：図の 11 項目の食品類について「殆ど毎日摂取する」と回答したものを１点として合計し、「食事のバランス度」（バランス度 11 点満点）としました。バランス度の平均値は男子では 3.7、女子は 4.8 点で、女子の方がバランスの良いことが認められました。次に男女それぞれの平均値を中心にバランス度を２群に分類し、各調査項目とクロス分析を行ったところ、バランス度の良い選手は、男子では「朝食を摂取」しており、「サプリメント非摂取」という者が多い傾向にありました。女子ではバランス度の良い選手は、「食事に気をつけている」、「練習中の水分摂取に留意している」という者が多い傾向にあり、さらに１日の練習時間は３時間が殆どであり、バランス度が良くない者は４時間と回答する者が多いことが認められました。

Ⅵ．おわりに

U-19 全日本ハンドボール選手の日常における食生活は、ハードな練習の割合にはアンバランスな食品選択者が多いことがみられました。特に女子は、男子よりバランスよく食べているにも関わらず「食事に気をつけている」という選手が少なく、食事を当たり前の習慣として気にせず摂取していることが窺えます。世界で対等に競技していくためにはトレーニング内容の充実も必要ですが、日常の食生活に留意していくことで、心身ともにレベルアップする余地がまだまだあります。本人には勿論のこと、家族等周囲の人々に対する一層の栄養教育の必要性が望まれます。

スコアールーム ①

高松宮記念杯男子第51回女子第44回、平成20年度全日本学生ハンドボール選手権大会

開催期日：2008年11月20日（木）～24日（月）
会　　場：山口県・周南市総合スポーツセンター、下松スポーツ公園体育館

【男 子】

▼1回戦

日本体育大学 36（20－9、16－8）17 関西学院大学
中部大学 41（21－16、20－14）30 国際武道大学
富士大学 28（14－16、14－8）24 広島大学
名城大学 38（25－12、13－12）24 函館大学
筑波大学 34（16－8、18－8）16 天理大学
関西大学 46（19－7、27－11）18 金沢大学
福岡大学 34（16－17、18－14）31 法政大学
日本大学 30（16－13、14－15）28 中京大学
東海大学 45（21－18、24－10）28 桃山学院大学
東北福祉大学 39（21－17、18－15）32 高松大学
愛知教育大学 28（12－15、16－11）26 信州大学
国士舘大学 31（16－13、15－11）24 大同工業大学
早稲田大学 37（21－13、16－14）27 愛知大学
明治大学 41（19－16、16－19）37 福岡国際大学
（1－1 延長 5－1）
大阪経済大学 29（18－8、11－18）26 中央大学
大阪体育大学 36（18－19、18－13）32 順天堂大学

▼2回戦

日本体育大学 46（25－15、21－19）34 中部大学
名城大学 31（17－9、14－11）20 富士大学
筑波大学 31（18－10、13－16）26 関西大学
日本大学 25（12－10、13－12）22 福岡大学
東海大学 51（25－11、26－12）23 東北福祉大学
国士舘大学 34（16－10、18－11）21 愛知教育大学
早稲田大学 29（15－10、14－12）22 明治大学
大阪体育大学 29（12－8、17－12）20 大阪経済大学

▼準々決勝戦

日本体育大学 36（16－13、20－18）31 名城大学
筑波大学 34（17－9、17－14）23 日本大学
東海大学 32（18－9、14－20）29 国士舘大学
早稲田大学 25（13－12、12－12）24 大阪体育大学

▼準決勝戦

日本体育大学 35（13－12、22－15）27 筑波大学
早稲田大学 33（5－12、20－13）30 東海大学
（2－1 延長 6－4）

▼男子決勝戦

日本体育大学 31（18－11、13－17）28 早稲田大学

【女 子】

▼1回戦

福岡大学 21（11－11、10－9）20 日本女子体育大学
富士大学 32（16－12、16－13）25 環太平洋大学
茨城大学 28（15－12、13－13）25 中京大学
天理大学 29（15－14、14－12）26 富山国際大学
東海大学 29（14－9、15－5）14 沖縄国際大学
中京女子大学 41（20－2、21－2）4 北星学園大学
日本体育大学 35（19－5、16－5）10 名古屋文理大学
大阪体育大学 32（17－9、15－4）13 東北福祉大学

▼2回戦

筑波大学 36（19－8、17－7）15 福岡大学
関西大学 25（13－11、12－9）20 富士大学
早稲田大学 29（15－9、14－14）23 茨城大学
大阪教育大学 31（14－7、17－4）11 天理大学
東京女子体育大学 24（16－6、8－13）19 東海大学
福岡教育大学 26（18－8、8－15）23 中京女子大学
国士舘大学 33（16－9、17－8）17 日本体育大学
武庫川女子大学 36（14－9、22－4）13 大阪体育大学

▼準々決勝戦

筑波大学 37（21－7、16－7）14 関西大学
大阪教育大学 37（18－13、19－14）27 早稲田大学
東京女子体育大学 38（19－9、19－8）17 福岡教育大学
国士舘大学 22（12－9、10－12）21 武庫川女子大学

▼準決勝戦

筑波大学 34（16－13、18－8）21 大阪教育大学
東京女子体育大学 32（21－11、11－9）20 国士舘大学

▼女子決勝戦

筑波大学 25（12－12、13－8）20 東京女子体育大学



スコアールーム ②

第60回全日本総合選手権大会

開催期日：2008年12月17日（水）～21日（日）
会　　場：石川県・いしかわスポーツセンター

【男　子】

▼1回戦

筑波大学	35	（16－12、19－10）	22	氷見クラブ
三重ホンダクラブ	25	（15－11、10－11）	22	早稲田大学
豊田合成	37	（17－12、20－11）	23	F O G

▼2回戦

北陸電力	29	（12－14、17－7）	21	東海大学
トヨタ車体	41	（20－12、21－19）	31	豊田合成
トヨタ紡織九州	31	（19－14、12－10）	24	筑波大学
Honda	23	（14－10、9－12）	22	三重ホンダクラブ

▼3回戦

大同特殊鋼	34	（18－7、16－12）	19	北陸電力
トヨタ車体	36	（19－15、17－10）	25	日本体育大学
湧永製薬	24	（10－13、14－8）	21	トヨタ紡織九州
大崎電気	28	（14－11、14－13）	24	Honda

▼準決勝

大同特殊鋼	26	（14－14、12－10）	24	トヨタ車体
大崎電気	24	（11－9、13－13）	22	湧永製薬

▼決　勝

大同特殊鋼	38	（20－12、18－14）	26	大崎電気

※3年連続13回目の優勝



【女　子】

▼1回戦

東京女子体育大学	31	（16－6、15－13）	19	香川銀行T・H
三重バイオレットアイリス	27	（9－10、18－13）	23	洛北高校
HC名古屋	31	（14－13、9－10）	30	大阪教育大学
		（2－3　延一　2－1）		
		（4－2　延二　0－1）		
筑波大学	44	（24－7、20－10）	17	コスモスピッキーズ

▼準々決勝

オムロン	34	（17－12、17－14）	26	東京女子体育大学
ソニーセミコンダクタ九州	26	（12－8、14－12）	20	三重バイオレットアイリス
北國銀行	45	（22－8、23－7）	15	HC名古屋
筑波大学	22	（14－6、8－9）	15	広島メイプルレッズ

▼準決勝

オムロン	31	（17－7、14－14）	21	ソニーセミコンダクタ九州
北國銀行	35	（18－9、17－14）	23	筑波大学

▼決　勝

オムロン	25	（12－9、7－10）	24	北國銀行
		（3－2　延一　0－1）		
		（1－1　延二　2－1）		

※4年連続12回目の優勝

【個人表彰】

▼最優秀監督賞

男　子　清水　博之（大同特殊鋼）
女　子　黄　慶泳（オムロン）

▼最優秀選手賞

男　子　武田　享（大同特殊鋼）
女　子　藤井　紫緒（オムロン）

がんばれハンドボール10万人会「サポート会員」11・12月入会・継続会員

【栃木】坂本　定芳【群馬】高橋　潔【埼玉】平野　和弘、松本　英之、岡村　昭二【千葉】藤田　八郎【東京】下里　晴美、仁平　好則、岩崎　祐子、三浦　丈治、蒲生　澄子、堀江　成典、岡前　義春、後藤　恵理子、青木　宏治、佐藤　俊男、佐藤　映子【神奈川】加古川　正巳、白井　香代子、田原　やよい、萬福　利香【長野】後藤　政俊【富山】吉水　慎一
【石川】伊藤　義直【福井】松田　範幸、佐々木　静夫、角谷　喜代重【静岡】村井　美保子【愛知】内田　有紀、佐藤　壮一郎、野田　清、宮地　光男、西口　誠一郎【三重】大石　博義、細野　秀男【滋賀】高畠　典克【京都】守本　幸三郎、大渡　利巳、大渡　健太郎、福田　隆生【大阪】山中　善之祐、赤星　明、平田　光徳、深田　礼子
【兵庫】簗瀬　ちなみ【鳥取】足立　逸郎【岡山】木村　博子、木村　佳菜、奥埜　美峰、奥埜　啓子、木村　菜見
【広島】白石　隆、西山　絵理、山本　伸二、樋野村　勉【熊本】佐久間　克彦

【2月の行事予定】

【会議】……………………………………………………

2月14日(土)　第2回評議員会(東京)
2月21日(土)　第3回理事会(東京)
2月22日(日)　事務取扱責任者会議(東京)

【大会】……………………………………………………

2月12日(木)～14日(土)
全日本実業団チャレンジ2009(宮崎県)

HAND BALL CONTENTS Jan. Feb.

(登録チームの購読料は登録料に含む)

asics

sound mind, sound body

JAPAN、名品の系譜。

機能だけではない、風格のようなものがなければならぬ。
先端のテクノロジーでさらにパワーアップした機能を備えて
新しくなったスカイハンドJAPANシリーズ。
グリップ力に優れた国産ラバー採用のJAPANラバーソールと、
しなやかで通気性のあるエクセーヌを使ったカラーアッパーに
ソール前足部のベンチレーションホール等々。
インドアを制するミドルカットとローカットが揃った。

足入れ感を高めてクラシカルな名品復刻モデル。

スカイハンド® JAPAN-MT

THH514 ¥16,800(本体¥16,000)
- カラー：5093 ネイビーブルー×シルバー
- サイズ：23.0〜29.0cm



名品スカイハンドSPのフォルムを受け継いだローカットモデル。

スカイハンド® JAPAN-S

THH515 ¥15,750(本体¥15,000)
- カラー：2300 レッド×パールホワイト
  5093 ネイビーブルー×シルバー
- サイズ：23.0〜29.0cm



JAPAN
JOC オフィシャルパートナー
©1993 JOC® JOC P-002

株式会社アシックス

アシックスシューズのストライプデザインはアシックスの商標であり、世界の多くの国で登録された商標です。 表示価格は消費税込みのメーカー希望小売価格です。( )内は消費税抜きの本体価格です。http://www.asics.co.jp 商品についてのお問い合わせは「アシックスお客様相談室」までどうぞ。03-3624-1814、06-6385-1155

(財)日本ハンドボール協会編 『ハンドボール』 第四九七号

昭和四十年六月七日 第[illegible]種郵便物認可

平成二十一年一月二十六日印刷
平成二十一年二月一日発行

東京都渋谷区神南一―一―一
電話、代表〇三―三四八一―二三六一
振、[illegible]〇一二〇―七―一〇二九三

編集兼発行人 川上憲太

定価 年間三三〇〇円